一番最初に千尋とした時は、フワフワして気持ちが良い、だった。
二回目はフワフワだけじゃなくて、少し苦しくて辛い事もあった。それから幾度となく体を重ね、その二つの感情は背中合わせなのだという事を知った。そして今はもう一つの感情を知った。
それは激しすぎる快感が長く続くと甘ったるいような苦痛とよく似ているという事だ。
千尋はいつものように鈴を抱きしめ、指先で鈴の背中の傷をそっとなぞった。
「んっ」
「ああ、すみません。痛かったですか？」
「いえ……くすぐったい……です」
違う。これはくすぐったいのではない。まだ鈴の体が千尋の指先に反応してしまうだけだ。
どこに触れられても全身が勝手に反応してしまう。こんな事は初めてで、何だか怖い。
鈴はじっと千尋を見上げた。千尋も鈴を見下ろしている。その顔は心配そうな、けれど安堵するような不思議な顔だった。
「人間の体というのは随分と敏感なのですね。辛くないですか？」
「辛くはないですが、何だかずっとフワフワしてます……」
少しだけ見栄を張った鈴に千尋は柔らかく微笑む。

「そうですか。でも鈴さん、これが三日間続くのですよ？　耐えられますか？」
「た、耐えてみせます！」
　意気込んだ鈴を見てさらに千尋は笑う。
「そうですか。ではいつか全力であなたを抱ける日を楽しみにしていますね」
「え!?　ま、まだ全力ではないのですか!?」
「はい。流石に少しずつ慣らしていかないと人間に突然龍の全力はぶつけられません。それに元々はそのつもりだったのですよ。ゆっくりあなたの体を慣らしていくつもりだったのです。ですがそうも言っていられなくなってしまいました」
「加護のせい……ですか？」
「それもありますが、どちらかと言うと私のせいですね。私の方が先に我慢が出来なくなってしまいました。さっきも見たでしょう？　たったあれだけの事で角が出てしまうのですから」
　苦笑いを浮かべてそんな事を言う千尋に鈴も思わず笑ってしまった。
「でも可愛かったです、千尋さま」
「そうですか？　でも結果的にはこれで良かったのかもしれません。人の体は思っていたよりも敏感で、案外頑丈なようです」

そう言って千尋はまた鈴の背筋をなぞって鈴の反応を楽しむかのように口元を緩めた。そんな千尋を軽く睨むと、それでも千尋は嬉しそうに微笑む。

「当然です！　だって、今までも何人も人間が龍にと嫁いだのでしょう？　その龍たちが皆千尋さまのように優しかったかどうかは分かりません！　それでも皆子孫を残しているのです！」

「それは私を褒めてくれているのですか？」

「はい。だって菫ちゃんが言ってたんです。菫ちゃんの学友たちは皆、辛いとか痛いしか言わないって。龍と夜を重ねた方達もそうだったかもしれません。それでも皆耐える事が出来たのです。ということは、龍の全力をぶつけられても人間は大丈夫だということです！　きっと！」

「ふふ、きっと、ですか。そうですね。皆が皆私のように優しい訳ではないですものね？」

「その通りです。だから千尋さま、遠慮はしないでくださいね。私、思っているよりもずっと千尋さまとこういう事するの好きみたい」

鈴は千尋の胸に顔を埋めて呟いた。こんな事、千尋以外には絶対に言えない。

「この状況で、この体勢でそんな事を言うのですか？　あなたは」

困ったような千尋の声に鈴が顔を上げると、千尋は本当に眉を下げて困ったように微笑んでいる。

「すみません。でも……覚えていてほしかったんです。私は大丈夫です、と」

千尋はいつもありとあらゆる事から鈴を守ってくれる。大切に大切に扱ってくれる。それが痛いほど伝わってくるのだ。そんな千尋に鈴も同じだけ返したい。

鈴は千尋の腕の中で身じろぎすると、じっと千尋を見上げた。

「千尋さま」

「はい？」

「私達はあとどれぐらいこうして一緒にいられるのでしょうか？」

鈴の言葉に千尋は一瞬悲しそうに視線を伏せたが、すぐに鈴を安心させるように髪を撫でる。

「そうですね……今日、流星からあなたに手紙を送りつけてきた龍の裁判が開かれると連絡がありました。その方は元々初の友人のご令嬢でしたが、もしかしたらそこから芋づる式に何か分かるかもしれません。そうしたら事態は一気に動くでしょう」

「……それは、あと少しで千尋さまはあちらに戻ってしまうという事ですか？」

「ええ。王が退陣すれば私の刑期も一旦は終わるでしょう。そうしたら私がここで龍神をする意味も無くなります。ですが、私は次の王が決まり正式に私の刑期が終了するまでは地上を守護するつもりでいるのですよ」

千尋の言葉に鈴は目を丸くした。まさか千尋がそんな事を言いだすとは思ってもいなかったから

だ。
「それはどういう意味ですか？　千尋さまは都に戻るのに地上を守護するのですか？」
「そのつもりです。ただ、そうなると鈴さん、あなたにはもう少しだけ龍神の花嫁を努めてもらわなければいけません」
「それはもちろんです！　でも具体的にどうされるのですか？」
「定期的に私がこちらに下りて来て神事をします。滞在出来る日数は限られていますが、あなたに全く会えないよりはずっと良いですから」
それを聞いて鈴はあからさまに顔を輝かせていたのだろう。千尋が鈴の頬をおかしそうに撫でておでこにキスをしてくれた。
「また神事で辛い思いをさせてしまいますが、協力してくださいますか？」
「はい！　辛くてもたった数日でも、千尋さまに会えるのなら……」
もちろん地上も守って欲しい。
けれどそれよりもずっと千尋に会える事が嬉しい。こんな事を言ったら皆は怒るだろうか？　それでも鈴はもう龍神の花嫁だけで良いとは思えなかった。
都と地上を繋ぐ鏡で千尋と連絡を取る事は出来るだろうが、顔を見るだけでは足りないと言う事

があの楽の裁判の時によく分かった。
　千尋が迎えに来てくれるまでにどれぐらいの年月がかかるのかは分からないが、その間にたった数日でも千尋と会えるかもしれない。そう思うだけで鈴の心は少しだけ晴れる。
「でも鏡での連絡は毎日しましょうね、鈴さん。あなたはどんどん綺麗になるので、私は心配でしようがないのですよ」
「私よりも千尋さまです！　今でさえ千尋さまは大人気なのです。それこそ都に戻ったらどれほどの人が手ぐすねを引いているかと思うと！」
　思わず拳を握った鈴に千尋はおかしそうに肩を揺らす。
「手ぐすねを引いて、ですか。もしかして鈴さんは辞書を丸暗記しているのですか？」
「何故ですか？　間違えていましたか？」
「いえ、間違えてはいませんが、あまり日常会話には出て来ない言葉だなと思いまして」
「そ、そうですか……」
「いいじゃないですか。何度も言いますが、私はあなたのそういう所が好きなのですよ。もちろんそれだけではありませんが」
　まだおかしそうに笑う千尋に鈴は軽く頬を膨らませると、千尋の陶器のような胸におでこを押し

付けた。
「私だって千尋さまが大好きです。この気持ちは負けてません！」
「おや、そうですか？　私があなたを思うよりもあなたは私を思ってくれているのですか？」
「当然です！」
「そうですか。それを聞いて安心しました。一度気付いてしまった私の愛情は重すぎると常々皆に言われるので心配していたのです」
「心配は無用です。私にとっては丁度良いです」
鈴の答えにとうとう千尋は声を出して笑う。その顔はとても楽し気で、憂いなんて何もないように見えた。
この日から鈴と千尋は一週間の内に最低でも三日は寝室を共にした。
もちろん鈴もそれに応えた。そうする事で日々の小さな嫌がらせに発動する加護にも鈴の体力が尽きる事は無くなったのだが――。
「ちょっと鈴、大丈夫かい？　また腰押さえて」
「は、はい、大丈夫です」
苦笑いを浮かべる鈴に雅も何かを察したかのように苦笑いを浮かべる。

「まぁ、あれだ。千尋が都に戻るまでの我慢だよ」
「千尋さまが都へ戻ったら嫌がらせは無くなるのでしょうか？」
「無くなりはしないかもしれないけど、減るんじゃないか？　あいつが放っておくとは思えないからね」
　その言葉に鈴は妙に納得してしまった。雅の言う通りだ。千尋が戻ったらこんな状況を放っておくわけが無いのだ。
　それに今は羽鳥や流星、息吹が都で戦ってくれているようで、日に日に嫌がらせの回数は少なくなってきている。
「今日も元気にこうやって雅さんと繕い物が出来るのは、千尋さまと都の皆さんのおかげです」
「いや、元気ではないだろ。ずっと腰押さえて可哀相に。まぁでも加護のせいで衰弱するよりはちょっとした腰痛で済んでる方がずっとマシだよ。それに背中の傷も全然傷まないんだろ？」
「そうなんです！　菫ちゃんも叔母様もそれにはすごく驚いていて、前に貰った薬なんてまだ一度も手をつけていないんです！」
「へぇ！　梅雨を乗り切ったのも凄いと思ったけど、後は台風の時期だね」
「はい！　ただ……」

「ただ、なんだい？」
「もしかしたら千尋さまはそろそろあちらに戻ってしまうかもしれません。そうしたらまたお薬のお世話になるかもです」
それが切なくて視線を伏せた鈴を見て雅も悲しそうに眉尻を下げて鈴の頭を撫でてくれる。
「すぐに迎えにくるよ」
「そうでしょうか？」
「ああ。だって、千尋だよ？　あんたをいつまでも放っておく訳ないだろ？」
「……そうですね」
鈴はきっと自分で思っている以上に千尋に愛されている。それを心に刻みつけるように頷いた。
「では私は千尋さまがあちらにお戻りになるまで、精一杯尽くそうと思います！」
「いや、今でも十分だから安心しな。あいつは世界で一番幸せな男だよ」
握りこぶしを握って宣言した鈴に雅はお腹を抱えて笑う。そんな雅を見て鈴も思わず笑ってしまった。

一度は収まったと思われていた鈴への、というよりは地上への嫌がらせが激化しだしたのは、そろそろ夏も終わろうかという頃だった。

「……千尋……さま……大丈夫、ですから。そんな怖い顔……しないで」

鈴は布団から手を出してそっと千尋の手を握りしめてくる。千尋はその手をしっかり握ると、そのまま祈る様におでこにあてた。

「話さなくていいですから。力を流します。どうか目を閉じて楽にしていてください」

鈴は早朝にまるで流星群のように降り注いだ都からの矢のせいで大きな加護を使った。千尋が気付いた時には加護は既に発動していて止める事すら出来なかった。

「まさか私よりも早く危険を察知するなんて思ってもいませんでした」

番の加護は持ち主の心に呼応する。千尋が気づくよりも先に加護が発動したという事は、鈴がそれほどまでにこの地上を、この屋敷を、そして千尋達を守りたいと常々思っているという事だ。

けれどそんな大きな加護を使って人間である鈴が無事でいられるはずがない。案の定鈴はそのまま意識を失い、今に至る。

「せめてもの救いは私がここに居た事です。もしもこれが都に戻った後だったらと思うとゾッとし

ます」

千尋が鈴の手を握りしめたまま言うと、鈴がもう片方の手で千尋の頭を撫でてくれる。

「大丈夫、です。怠いだけで痛くもありません。それに、少し楽になってきました。ありがとうございます、千尋さま」

「鈴さん……」

こんな時でも相変わらず鈴は千尋にお礼を言う。お礼を言わなければならないのは千尋だと言うのに。

千尋は鈴のおでこの汗を拭うとそっと鈴を抱きしめた。

「お礼を言うのは私の方です。あなたがどれほどこの場所を、私達を守ろうとしてくれているのか痛いほど分かりました。ですが、私がいる間は都からの奇襲は私に任せてください。お願いですから」

「それは一体どうすれば……？」

千尋の言葉に鈴は首を傾げた。そんな鈴に千尋も苦笑いを返す。

「あなたには少し難しいかもしれませんね。自分の事だけを考えるなんて、きっとあなたには出来ないでしょう？」

「常日頃から私は割と自分の事しか考えていないような気がするのですが……」
「いいえ、いいえ。あなたは常に周りの人の事を考える人です。おまけに酷く我慢強い。だから余計に心配なのです。同じような事が起こったら、あなたはまたきっと同じ事をするでしょうから」
少しずつ顔色が戻ってきた鈴を抱き起こし、水を飲ませてやる。鈴は照れくさそうに千尋にもたれて一滴も残さずに水を飲み切った。
「千尋さまのお水ですね」
そう言って微笑んだ鈴が堪らなくなって思わず抱き寄せたが、心のどこかでは都のなりふり構わない龍たちに怒りが湧いて来る。
こんな事をしておいて、本当に千尋の愛を鈴から奪い取れるとでも思っているのだろうか？　それとも何か他の目的があってこんな事をしでかしているのだろうか？　間違いなく唆しているのは謙信か千眼だ。
千尋は鈴を寝台に横たえると、鈴が眠りにつくまでずっと頭を撫でてやっていた。
やがて鈴の小さな寝息が聞こえてきたので静かに部屋を出て足早に自室に戻り鏡を取り出して鏡を開くと、まるで千尋からの連絡を待っていたかのように流星が映し出された。
「流星、相手は誰です？」

『修理工房の嫁で君の矢で一撃だった。彼女の番が君を呼び戻せって怒り狂ってる』
「そうですか。出来れば私も今すぐ戻りたいですね。そしてその番を問い詰めたいですよ」
冷たい声で言うと、流星は顔を引きつらせて頷く。
『うん、そうだろうと思うけど君はもう少し大人しくしててね。そもそも番が居るのにそんな事しでかす奴だから、そうとう君に惚れ込んでたか、誰かの甘言に釣られたかのどちらかだよ』
「初のように？」
『そ。初みたいに。ああ、王はあれからずっと引き籠って初の面倒を見ているそうだよ、表向きは』
「表向きは？」
『うん。この数カ月、誰も王の姿を見ていない。秘書は心労の為の休暇を取ってるだなんて言ってたけど、俺は信じてない。今は羽鳥の目があちこちに散らばって監視してるよ』
「そうですか」
千尋は頷いて眉根を寄せた。そんな千尋を見て流星が声を潜めて言う。
『鈴さんは大丈夫？　あれ、番の矢だよね？』
「ええ。今は大分落ち着きました。私が動くよりも先に鈴さんの加護が発動するとは思ってもいなくて、対処が遅れてしまったのですよ」

『ああ、そういう事だったんだ。だから今回はこちらに水害が起こらなかったんだね。そういう意味では鈴さんに俺達も感謝しないとな』
「感謝？　肝心の鈴さんは意識を失って倒れたのですよ？　いっそその地域一帯を沈めてやれば良かったと思っていますよ」
　千尋の言葉に流星は苦笑いして言った。
『うん、君がすぐに反応してたらそうなってただろうから、感謝なんだよ。鈴さんは都も守ってくれたんだ』
「……それはそうかもしれませんが……」
　鈴がそこまで考えたとは思わないが、結果的にはそういう事だ。
『君が怒ると怖いからね。でも今回の件で少しは抑止力になりそうだよ』
「どういう意味です？」
『君の番の加護は一般人だろうが犯罪者だろうが遠慮なくぶち抜くって事が分かったからね。ついでに言うと今回の犯人は羽鳥曰く、前回地上に手を出した雷龍と同一人物の可能性があるみたいだよ』
「そうなのですか？」

『うん。彼女が嫁いだのはあの修理工房の長男の所なんだ。王室御用達の工房で、代々宮殿で壊れた物の修理をしてる所だよ。だから番の方も怪しいね。流石に今は君をすぐに呼び戻せって怒ってるけど、一晩明けたらケロッとしてそうだよ』

「番よりも任務、ですか」

『羽鳥が言ってたみたいに愛があって婚姻を結んだ訳じゃないのなら、案外そんなものなのかもしれない。愛情深い龍がやる事とは思えないけどさ』

「全くですよ。それで、五月さんは結局追放処分ですか？」

『うん。でもあの人は高官の娘だからすぐに戻って来るよ。おまけに今や彼女は一部で英雄扱いだ。君の立ち位置は今やすっかり仕方なく地上を守っている哀れな龍神だよ。だから地上を破壊して君を早くこちらに戻してやるんだってさ。そして君の加護を利用している浅ましい人間から取り返してやりたいそうだよ』

　呆れたようにそんな事を言う流星に千尋も呆れてしまった。

「よくもまぁ、そこまで都合良く事実を捻じ曲げられますね」

『流石の俺も驚いたよ。まさか龍がここまで愚かな事をするだなんて思いもしていなかったから。でも良い報告もある。栄が羽鳥の実家の人達と協力して親衛隊と真っ向勝負をし始めたんだ』

「栄が？」

『うん。そしてそちらの勢力もじわじわと伸びてる。主にあの時の裁判を見ていた人達が広めてくれてるんだろうけど、こちらの主勢力は一般市民だ。彼らからしたら鈴さんがやってきて都がさらに発展する事を望んでいるって言うのと、水龍が人間の娘を選んだって事に感動した人達が中心になってるんだ。その中には君に憧れていた子達も沢山いるみたいだけど、その子達は自分達は選ばれなかったけれど、あの千尋さまが人間を選んだという事は、きっと素晴らしい娘に違いないって思ってるみたい。まぁ、当たってるよね』

「素晴らしい人達ですね。一人ずつハグして回りたいぐらいですよ」

『ハグって？』

「抱きしめるという意味です。なるほど、そちらの事情はわかりました。ところで流星」

『うん？』

「番の加護の力を弱めるにはどうすればいいか知っていますか？」

真顔で言った千尋を見て流星も真顔で言った。

『知らない。ていうか、そんなの出来ない』

と。

「……ですよね。これは困りましたね」
『どうしたの？』
「いえね、鈴さんは本当に、本っ当に優しい方なのですよ」
『……うん』
「なのでもっと自分本位に生きて欲しいと言っても、それが出来ないのです」
『はぁ……それで？』
「今のままでは今回のような事があった時、また彼女は率先して加護を発動してしまうという事です。そして私の力はそれに応えてしまう。つまり、鈴さんが地上の皆を、私達を常々思いすぎているが故に鈴さんは自らの命を削っているのです」
『それは惚気と自慢なの？』
「そう聞こえるかもしれませんが、自慢でも惚気でもなく心配をしているのですよ」
『あー……うん。えっと、君も知ってると思うけど一度つけた番の加護はつけられた本人が死ぬまで消えないし、その加護の強さはつけた人の力によるよ。つまり、どう足掻いても君の心配を解決する方法は無いんだよ。馬鹿な事しでかす輩が居なくならない限りね』
「確かに。ではやはり都を沈めてしまいましょうか。どうやらそれしか手は無さそうです」

淡々とそんな事を言う千尋に流星が慌てたように首を振った。
『待って待って！　早まらないで！　何とかする！　すぐに何とかするから！　親衛隊と千眼たちの動きだけでもややこしいのに、ここに君まで参戦してきたらもう俺達の手には負えないよ！』
「ではまず王を捕まえてください。何をするつもりか知りませんが、嫌な予感がします」
『それはそうだね。とりあえず君に出来る事は鈴さんの加護が発動する前にどうにかしてこちらの動きを察知する事だよ』
「やはりそれしかありませんよね。分かりました。それではまた連絡します。何か進展したらまた教えてください。それから今日を無事に皆さんが過ごせているのは全て鈴さんのおかげなのだとしっかり周知しておいてください」
『はは、分かった。それじゃあまた。鈴さんにお礼言っておいてね』
「……ええ」
鈴を都のいざこざなどに巻き込みたくないけれど、今回のような事があれば嫌でも巻き込んでしまう。最悪の場合、千尋は本当に都を沈めてしまいかねない。
鏡を仕舞ってため息を落とした千尋は、そのまま鈴の部屋へと向かった。
鈴の部屋の前では心配そうな楽が部屋の前を行ったり来たりしている。

「楽、どうかしたのですか？　鈴さんに何か用事ですか？」
「千尋さま！　あ、いえ別に用事って訳じゃないんですけど、あいつ、大丈夫かなって思って」
そう言う楽の手には数冊の本が握られている。
「それは？」
「え？　ああ、これはあいつにと思って。菫から借りた奴で面白かったんです。皆幸せになるし、あいつ自分のは全部読んじゃったって言ってたし……」
「わざわざ買ってきたのですか？」
「はい。さっき弥七さんと買い物行った時に本屋に寄ってもらって」
それを聞いて千尋は思わずにこりと笑って楽の頭を撫でた。
「成長しましたね、楽」
「へ？」
「あなたが素直で優しい事はよく分かっていましたが、まさか鈴さんの為にそこまでしてくれるとは思っていませんでしたよ」
そんな千尋の言葉に楽はキョトンとして言う。
「だってあいつは千尋さまの花嫁だし、てことは俺の女主だし、か、家族だし……」

耳まで真っ赤にしてそんな事を言う楽に千尋はさらに笑みを深めた。
「そうですね。家族ですものね。多分起きていると思うので渡してあげてください。きっと喜びますよ」
「は、はい！」
普段の千尋なら楽と鈴を二人にしたりはしないが、今日はそっと楽の背中を押してやった。そして楽が鈴の部屋に入った事を確認してその場を後にする。
千尋のようにある程度大きくなってから里子に出された訳ではない楽は、自分の両親の事を全く知らない。顔も声も香りも何も。そんな楽が家族だと思える人達に出会えたというのは千尋にとっても嬉しい事だった。いつの間にか楽は千尋にとって執事以上の存在になっていたらしい。
千尋は口元に手を当てながら笑いを噛み殺す。
「こんな風に繋がりというのは広がるのですね」
他人との繋がりを排除するような生き方をしてきたつもりはないけれど、都では常に孤独を感じていた。それは千尋の属性であったり力であったりした訳だが、鈴が本当の千尋を引き出してくれたおかげで、あれほど遠ざかっていた他者との繋がりが出来始めたのだ。
すると不思議な事に千尋の中の考え方も次第に変わっていった。誰かに本当の自分を見つけても

らうという事は、思っていたよりもずっと大切な事なのかもしれない。
「いたいた！　千尋、あんたこんな所でうろついてたのか！」
「雅？　どうかしたのですか？」
「ああ。今しがた幸之助から電報が届いたんだよ！」
「幸之助さんから？　もしかして佐伯絡みですか？」
「その通りだ。ほらよ」
そう言って雅が差し出してきたのは一通の電報だ。中を開くとそこには『佐伯の者が不思議な事を言っているのですが、お兄さまには分かるでしょうか？』と書かれている。
千尋はそれを読むなりすぐに階下に降りて、電話のハンドルを回し交換手を呼び出すと、警察総監の部屋へ繋いでもらう。
「幸之助さん、電報を読みました。蘭さんですか？　それとも久子さんですか？」
『お兄さま、ご無沙汰しております。電報の内容ですが、どちらでもありません。佐伯家に勤めていた者からの情報提供です。事件前日の深夜、蘭と久子が井戸に向かって話していたそうです。相手の声は聞こえなかったけれど、二人は何やらとても楽しそうだった、と。そしてこうも言ったそうです。ではそれを実行すれば千尋さまが手に入るのですね、神様、と』

それを聞いて千尋はそっと目を閉じて息を吐いた。
「ありがとうございます。ちなみにその井戸というのはどこにあるのか分かりますか？」
『ええと……ああ、佐伯の屋敷にある井戸のようです。あまりにもその光景が不気味だったと言っていました』
「ありがとうございます。幸之助さん、この件に関しては私の管轄です。あなた達はその証言をこれ以上追わないようにしてください。でなければ、第二、第三の犠牲者が出るかもしれないので」
千尋の言葉に電話の向こうの幸之助が息を飲んだのが分かる。本当はもっと詳しく聞きたいが、交換手にも会話を聞かれている為、あまり滅多な事は言えない。
『お兄さま、どうかお気を付けください』
「ええ、ありがとうございます。それでは、また」
千尋はもう一度ハンドルを回し交換手に通話が終わった事を伝えると、受話器を下ろした。
「なんだったんだい？」
「雅、佐伯家の家の井戸を知っていますか？」
「井戸？　そういやそんなのあったね。あれがどうしたんだい？」
「もしかしたらあそこに原初の水が仕込んであった可能性があります」

「はあ!? そ、それはどういう……いや、それ以前にどうして佐伯家の連中は原初の水なんて持ってたんだい!?」
「入手経路は分かりません。ただ、それを使って何かをしていたと考えるのが妥当でしょう」
「……そもそも原初の水ってのは一体何なんだい？」
「原初の水というのは初代水龍が神から直接預かった物だと言われています。神は姿が瓜二つの龍と人間という種族を作った。そして神通力などと言った力を龍に、そして閃きを人間に与えたそうです。その後住む場所を分け、その二つを繋ぐ唯一の手段として原初の水を初代水龍に預けたという、まぁ伝説なのですが、その水に出来る事は地上への干渉です。鏡や皿が良い例ですね。あれは都でも限られた龍しか持っていません。それはあの鏡や皿に微量ですが原初の水が使われているからです。そしてその水の管理は歴代の王にしか許されていないのですよ」
「なるほどね。要は貴重な水だって事か。で、それが何で佐伯家にあるんだよ？」
「分かりません。ですが、その謎が解ければ少なくとも王は引きずり降ろせるでしょう。雅」
そう言って雅を見下ろすと、雅は全て分かっているような顔をして頷く。
「……あたしはそれを見てくりゃいいんだね。でもそれはあたしが見て分かるもんなのかい？」
「いえ、混ぜられてしまっているようなので見た目はただの普通の水です。申し訳ないのですがそ

の井戸の水を少し汲んできてもらえますか？　ああ、念のために楽を連れて行ってくださいね」
「分かった。楽は随分戦闘力が上がったみたいだしな！」
「それはもう、各段に上がっていると思いますよ。火龍は龍の中でも群を抜いて大きくて強いですからね。今から成龍になるのが楽しみです」
成長して大人になった楽を想像して千尋が目を細めると、そんな千尋を見て雅がおかしそうに笑った。
「まるで息子の成長を楽しみにしてる父親みたいだね。とりあえずあたしはその井戸から水汲んでくるよ」
「ええ。雅、よろしくお願いしますね」
「はいはい」
そう言って雅は猫の姿に戻ると廊下を駆けて行く。その後ろ姿を見送って千尋もすぐさま動き出した。
佐伯家の屋敷の事は屋敷に住んでいた人に聞くのが一番早い。
そう考えた千尋は鈴の部屋へと急いだ。ドアをノックすると中から幾分元気になった様子の鈴の軽やかな声が聞こえて来る。

「具合はどうですか？　鈴さん」
「千尋さま。もう全然何ともありません。ですが、楽さんに今日は大人しく寝てろと叱られてしまいました」
「それは私も楽に同感ですよ。あなたは普段から働きすぎなのです。雅のようにもっと適度にさぼってください」
「そんな事は初めて言われました！」
「ええ、私も初めて言いました」
おかしそうに笑う鈴に千尋も思わず笑ってしまったが、今はそれどころではないと気を取り直す。
「ところで鈴さん、少し聞いても構わないでしょうか？」
「はい？」
「佐伯家の事なのですが――」
千尋が佐伯の名を出した途端、鈴の心音が跳ねた。それに気付いて思わず口を噤むと、すぐさま鈴が申し訳なさそうな顔をする。
「すみません……もしかしてまた何か佐伯家の人達がご迷惑をおかけしましたか？」
「どうして鈴さんがそんな顔をするのですか？」

「佐伯家は一時とは言えお世話になっていた家です。私の扱いがどうであっても、お世話になっていたのは事実ですから……」

そう言って深々と頭を下げて来る鈴に千尋は慌てて言った。

「あなたは本当に優しい人ですね。顔を上げてください。今回は別に佐伯家の人が何かをしてきた訳ではないですよ」

千尋の言葉に鈴はぱっと顔を上げてホッとしたように微笑む。

「佐伯家について聞きたい事、でしたか？」

「ええ。分かる範囲で良いので答えてもらえますか？」

「はい、もちろんです」

安心したような鈴に千尋も内心ほっとしつつ、寝台の側にあった椅子に腰かけて話し出した。

「では最初に、佐伯家の庭に井戸はありましたか？」

「ありました。古い井戸が二つと、新しい井戸が一つ」

「なるほど。三つも井戸があったのですね。でも三つは流石に多くないですか？　全て生活用水だったのですか？」

「いいえ。一番新しい井戸の水だけが生活用水だったんです」

「では残りの二つは？」
「一つは枯れかけた井戸で水がもうほとんど無いので決まった時以外は絶対に開けてはいけないと言われていました。そしてもう一つはいわく付きだって蘭ちゃんが冗談を言っていましたが……詳しくは私には分からないです。ごめんなさい……」
　鈴の答えに千尋は口元に手を当てて考え込んだ。鈴はどうやら蘭が冗談を言っていただけだと思っているようだが、恐らくその井戸は本当にいわく付きだったのではないだろうか。
「他にその曰く付きの井戸と枯れかけの井戸について何か聞いた事はありませんか？」
「井戸についてですか？　井戸に関してはそれ以外は特に聞いた事がないです」
「そうですか……では、神様については？」
「神様ですか？」
「ええ。久子さんは随分信心深い方だったと聞いています。一体何の神を祀っていたのですか？佐伯家は」
「蛇です。大蛇を祀ってるって菫ちゃんが教えてくれました」
「……大蛇……なるほど。分かりました」
　千尋の言葉に鈴は目を丸くした。

「あ、あの、今ので何か分かったのですか？」
「ええ。もしかしたら佐伯家はかなり古くから龍と繋がりがあったのかもしれません。もしかするとはるか昔は龍神に仕える家系だったのかもしれませんね」
「！」
「でもその龍は地上での龍神の役目を終えた。それと同時に佐伯の家系は龍に仕える家柄では無くなった。けれど、何故かまた佐伯家と龍の繋がりが出来た……ふむ。その龍の罪状を調べてみなくてはいけませんね。果たして何代前なのでしょう……」
ぶつぶつと呟く千尋を鈴はじっと見つめてくる。その視線に気付いて千尋はすぐさま笑顔を浮かべて鈴を安心させようとしたのだが――。
「千尋さま、私も神森家の一員です。一体何が起こっているのか教えてほしいです」
真っすぐで真摯な視線を前に千尋は完全に無力だった。
「そうですね。鈴さんはもうこの家の主ですものね」
そう言って千尋は新しく入った情報を全て鈴に話した。それを聞いた鈴は真剣な顔で頷き、何か考え込んでいる。
「どうかしましたか？」

「いえ、大した事ではないのですが、佐伯家の神棚に置いてあった蛇を思い出したんです。でもその蛇少し変で、手と足があったんです」
「手と足ですか。それはもう間違いなく龍でしょうね。他には何か気付いた事はありますか？」
「そうですね……神棚の掃除も私がしていましたが、細かい決まりが沢山あって、水は必ず枯れかけの井戸の水を汲むんです。その水を一週間陽の当たる場所に置いておくと、冬でも夏でも傷まず少しトロリとするのです。そうしたら神棚に上げてました。それから月に一度はお肉屋さんから届いた動物の臓物を処理してお酒と一緒に供えなければいけませんでした」
「どうやらその水こそが原初の水が混じった水のようですね」
「そうなのですか？」
「ええ。原初の水は火に弱くて腐りません。水とは言っていますが本来はかなり粘度のある物らしいのです。私も実際に見た事が無いので何とも言えませんが、恐らく陽に長時間当てる事で水を蒸発させて本来の原初の水の粘度に近づけようとしたのかもしれません。ですがもちろんそんな事で原初の水は本来の力を発揮しません。結果、声だけが届くようになったという事なのでしょう」
「なるほど……だから二人は井戸に向かって話しかけていたのでしょうか？」
「恐らくそうかと。よく思い出してみてください、鈴さん。供え終わった水は久子さんか蘭さんが

処理していませんでしたか？」

千尋の言葉に鈴はハッとした顔をした。

「言われてみれば、私は供えた水を下げた事がありません！」

「そうでしょう？　きっとその水を井戸に戻していたのですよ。そうしていつしか枯れかけた井戸の水が供えた水になり、純度も増して行く。あの二人は自分達が祀っていたのは大蛇だと思い込んでいたようですが、まさか龍に利用されているとは思ってもいなかったでしょうね。原初の水を取り扱う事が出来るのは王ただ一人です。けれど誰がいつ、どうやって原初の水を地上に持ち込む事が出来たのか、それが分かれば王は必ず失脚します。確か今までの龍神の日誌があの部屋に保管してあったはずです。あれを読んでみましょう」

今までの龍になど興味もなくて開いた事すらない歴代の龍の日記だが、もしかしたら重要な何かが書かれているかもしれない。

佐伯家が元々巫女家系だったのかどうかは分からないが、少なくとも近年の佐伯家は完全に龍に利用されていたようだ。

千尋の言葉に鈴が悲し気に視線を伏せて俯く。その横顔がやけに千尋には印象的だった。

千尋は蘭と久子が龍に利用されていたのではないか、と言った。きっとそうなのだろう。だとしたら佐伯家が今までしてきた悪行にはもしかしたらその龍が力を貸していたのかもしれない。鈴は龍と言えば千尋を筆頭に楽や流星、息吹、羽鳥しか知らない。だから余計に龍がそんな事をするだなんて思えなかった。

「龍でも、人のように誰かを陥れたり利用したりするのですね」

ポツリと呟いた鈴に千尋は真顔で頷く。

「残念ですが、そうですね。龍も神に創られた生物に過ぎません。人のように誰かを妬んだり何かを取り合ったりするのですよ」

「龍神様というイメージが強いのであまり想像が出来ませんが、ドラゴンと言われると何だかイメージ出来ます」

鈴の言葉に千尋は一瞬キョトンとして次いで苦笑いを浮かべた。

「はは、鈴さんの中のドラゴンは火を噴いたり人を食べるのでしたか？」

「はい。ドラゴンは怖いです。とても強くて怖い……」

「そうですね。ですがドラゴンも龍も元は同じ種族です。生活環境が違ったせいで私達の見た目は違いますが、それは国が違えば見た目が違う人間と同じ事。もしかしたら鈴さんの居たイギリスにも私達のように人に姿を変えてドラゴンが居たかもしれませんよ？」
「え!?　ド、ドラゴンも人になる事が出来るのですか!?」
「もちろんです。種族は同じですから。彼らは属性の力を炎に変えて吐き出したり、より遠くまで飛べるように翼が生えていたりするだけですよ」
「そうなのですね……それを聞くと何だかドラゴンが怖いだけではなくなったように思います」
「そうですか？」
「はい！　だって、きっとドラゴンの中にも千尋さまのように優しいドラゴンが居らっしゃるという事でしょう？」
「その通りです。地上のどこの地域にも龍の伝説は残っていて、様々な姿で祀られている。私のように罪を犯して地上を守護する事になった者もいれば、自ら地上を守りたいと思った者もいるでしょう。ね？　人間と同じでしょう？」
「はい。人間も違う種族を保護したり守ったりする方達がいます。やっぱり私達は同じ神様から創られた生物なのですね……でも、やっぱり私の神様は千尋さまだけです。どんな神様よりも、私は

あなたが良い」
　千尋が龍神という役目を持って地上に降りてきただけの生物だと聞いても、鈴はやっぱり千尋を信奉したい。
　そんな鈴の言葉を聞いて千尋は何だか泣きそうな顔をして微笑んだ。
「ありがとうございます、鈴さん。あなたのその言葉が聞けただけで私が龍神で居た時間は決して無駄ではなかったのだと思える事が出来ますよ」
　優しい声でそんな事を言いながら千尋はそっと鈴の頬を撫でる。その手があまりにも優しくて思わず鈴はうっとりと目を閉じた。
　しばらく二人は互いの存在を確かめ合う様に無言でそんな事をしていたが、ふと千尋が笑顔を浮かべた。
「さて、それではそろそろこちらからも反撃をしましょうか」
　何かをチャージしたかのような千尋の顔に鈴もコクリと頷いた。
「千尋さま、私に何か出来る事はありますか？」
「そうですね……では、私達の安全や安寧を願ったり考えるのは止めて、自分の安全だけを考えてください」

ニコリと笑ってそんな事を言う千尋に思わず鈴は青ざめた。
「む、難しい事を仰りますね……無理ですよ……」
「ですよね。でも本当にそれしかあなたを守る術が無いのですよ。では今まで通り美味しい食事とお菓子、それから美しい歌を聞かせてください。私があちらに戻るまでの間、毎日。ああ、もちろん体調が悪い日以外ですよ」
「それなら出来そうです！　私からも千尋さまにお願いしても良いですか？」
「ええ、もちろん」
笑顔で答えた千尋に鈴は勇気を出して言った。
「今日から千尋さまが戻られるその日まで、毎晩一緒に眠っても構いませんか？」
「え？」
「だ、駄目でしょうか……」
予想もしていなかったのか、千尋は目を丸くしてしばらく鈴を見つめていたが、やがて目を細めて嬉しそうに頷く。
「もちろんです。でもそんな事をしたら私はあなたを毎晩抱きしめて眠ると思いますが、それでも構いませんか？」

「はい」
「寝がえりも打てませんよ？」
「大丈夫です」
「それに毎晩手を出してしまうかもしれません」
「覚悟しています！」
鈴の答えを聞いて千尋はやっぱり嬉しそうに微笑んで鈴を抱きしめてくる。そんな千尋の背中に鈴も腕を回した。
この日からとうとう鈴と千尋の寝室は正式に一つになった。雅と眠る事が出来ないのは寂しいが、千尋が都に戻りまた迎えに来てくれるまでどれほどの年月を要するか分からないのだ。今だけは千尋を優先したい。
けれど番となった龍と毎晩共に眠るという事を、鈴は完全に甘く見ていた。千尋は宣言通りほぼ毎晩のように鈴に手を出してきたのだ！
「龍の体力は凄いって言うけど、本当に凄いのかもしれない……」
皿を洗いながら窓の外を見ると、そこには恐らく一睡もしていないであろう千尋が何やら真剣な顔をして弥七と話し込んでいる。

「千尋さま、ちゃんと寝てるのかな」
千尋は今や地上の事だけでなく都の事でも毎日毎日忙しくしている。夜だってきっとまともに寝ていない。こんな生活が続いていて、いつか千尋が倒れてしまわないか心配である。
けれどそれとは裏腹に短期で龍の力を受け入れている鈴はと言えば、加護に振り回される事は全くと言ってもいいほど無くなった。
「あんたも千尋も何だか最近異様に元気だね」
「そ、そうですか？」
昼食の後片付けをしながら鈴が言うと、皿を拭いていた雅がコクリと頷く。
「そうだよ。そろそろ台風が来るってのにあんたは全然薬を飲まないし、千尋はもう何徹だよってぐらい毎晩仕事してるだろ？」
「そうなんです！　それが心配で仕方ないのです！　千尋さま、ずっと私の頭を撫でたり子守歌を歌ったりして全然寝てないんです！」
手ぬぐいを握りしめて鈴が言うと、雅がそれを聞いて咽た。
「あんた達、毎晩そんな事してんのかい？」
「え？　ええ、まぁ……」

思わずお茶を濁した鈴に雅は何か察したように腕を組んで頷くと、何故かクルリと振り返った。
「だ、そうだ。鈴は全く寝ないあんたが心配なんだってさ」
「それはそれは……ご心配をおかけしてしまい申し訳ありません」
「千尋さま!?」
その声に驚いて振り返ると、炊事場の戸口に千尋が立っている。一体いつから居たのか、千尋はにこやかに炊事場に入って来たかと思うと、おもむろに鈴の後ろに回り込み、何を思ったか鈴の髪を編み始める。
「ち、千尋さま?」
「ああ、動かないでください。頼んでいた物が先程ようやく手に入ったのですよ」
しばらくして千尋は結い終わったのか鈴の正面に戻り、満足げに頷く。
「いつも用事をする時に適当な紐で結っているのを見て、いい加減どうにかしなければと思っていたのです。とてもよく似合いますよ、鈴さん」
そう言って千尋は鈴の頭をポンポンと軽く叩いた。それを受けて鈴は今しがた結われた自分の髪を触ると、毛先までしっかりと編まれていた。さらに髪先を見ると、そこには千尋とお揃いのリボンが結われていて綺麗な蝶々結びになっている。

「これ、千尋さまとお揃いですか？」
「ええ。同じ色の物は結構あったのですが、全く同じ物がなかなか無くて。仕方がないので私のを買った所に無理を言って染めてもらったのですよ」
「そ、そこまでしてくださったのですか！　ありがとうございます」
むしろ突然無茶を言われた職人さんにもお礼を言いたい。
確かに鈴はいつも料理をする時や用事をする時はそこらへんにある麻紐で縛っていたのだが、どうやら千尋はそれがずっと気になっていたらしい。
「あんたそんな事までさせたのか。店主も困ってたろ？」
「いいえ？　むしろはりきって染めてくれましたよ。なのでこれは雅に」
千尋はそう言って雅にもお揃いのリボンを手渡す。それを見て雅は鈴を見てニコリと笑い、千尋を見て顔をしかめた。
「鈴とお揃いは嬉しいけど、あんたともお揃いなんだろ？　複雑だねぇ」
「髪が元通りになったら使ってください。それまでは猫の時に首にでも巻きますか？」
「死んでも首輪なんてしないよ！　あれがどれほど苦しいか！　お玉の時にもう懲りたんだ！」
「雅さんは自由が一番です！　何も無くても愛らしくて綺麗です！」

「そうだよ！　さすが鈴だね。で、何だって私にもあるんだい？」
「雅だけではありませんよ。もちろん全員分あります。まぁ、楽と喜兵衛と弥七は引きつっていましたが」
「そりゃ引きつるさ。何に使うんだよ、あいつらがリボンなんて」
雅はそんな事を言うが、鈴にとってはとても嬉しかった。何だか神森家の一員だという気がする。
「皆でお揃いなのですね！　何だかそれだけでとても特別なように思えます。ありがとうございます、千尋さま」
「いいえ、どういたしまして。それで私の心配をしてくれているのでしたか？」
「はい……だって、千尋さま全然寝てないですよね？　それなのに毎日お仕事お仕事でいつか倒れてしまいませんか？」
少しでも千尋に休んでもらいたくて寝たふりをしても千尋にはすぐにバレてしまう。
「寝ていますよ。あなたよりも後に寝てあなたよりも先に起きているだけです。だからそんな顔をしないでください」
「でも……」
「龍は心と体の調和が取れていれば睡眠をほぼ必要としません。人間にとって睡眠は回復時間です

が、龍にとってもそれは同じ事です。私の睡眠時間が短いというのは、体の調和がきちんと取れているという証拠なのですよ」

「つまり、あんたは今すこぶる調子が良いということかい？」

「そういう事です。以前のように寝る間が惜しくて無理に起きて睡眠不足になっていた時と違って、今は本当に睡眠を必要としていないのですよ。だから何も心配しなくて良いのですよ、鈴さん」

そう言って微笑む千尋を見て鈴は胸を撫でおろした。そうだったのか。

それを聞いて一安心したが、だとしたら千尋は鈴が呑気に寝こけている間、ずっと鈴の髪を撫でたり歌ったりしているという事である。

それに気付いて鈴が思わず千尋を凝視して顔を赤くすると、千尋は何も言わずに笑っただけだった。

「ず、ずるいです！　私も千尋さまの寝顔が見たいです！」

「私の寝顔など見ても楽しくなどありませんよ。それよりも私はあなたの寝顔をずっと見続けていたいです」

「いいえ！　私だって――」

負けじと鈴が口を開こうとしたその時、突然雅が間に割り込んできた。

「ストーーーーップ！　覚えちまったよ、この単語。戯けんなら他所でやりな！　天気も良いんだから東屋とか行って二人でこっそり戯けてきてくれ！」
眉を釣りあげて雅は鈴と千尋の背中を押して炊事場から追い出してくる。
「追い出されてしまいましたね」
「はい……」
ついまたうっかり千尋と戯けそうになって炊事場を追い出された鈴は、しょんぼりと俯いた。そんな鈴の頭を千尋が撫でる。
「そんな顔をしないでください。後で一緒に雅に謝りましょう。それに片づけももう終わりだったのでしょう？」
「はい、それはそうなんですけど……ところで千尋さまはこれから何をされるのですか？　またお仕事ですか？」
千尋の言う通りだ。後片付け自体はもうほとんど終わっていたのだ。後で雅の好きな煮干しを茹でて謝ろう。
そんな事を考えながら千尋を見上げると、千尋は小さく首を横に振った。
「いいえ、今日はお休みです。鈴さんのこの後のご予定は？」

「私も特に何もありませんが……そうだ！　千尋さまのバイオリンが聞きたいです！」
「いいですね。では東屋で二人だけの音楽会をしましょう」
「はい！」
それから二人で東屋へ移動して小さな音楽会を開いた。穏やかで温かい日差しが心地よくて、こんな日がずっと続けば良い。
そんな事を考えながら千尋の空にまで届きそうなバイオリンの音を飽きる事なくずっと聞いていた。

別れの足音は、音も無く千尋と鈴に忍び寄って来ていた。
事の起こりは奇しくも鈴が神森家にやってきて丁度一年が経った日だった。
記念日だと言ってささやかなお祝いをして、鈴は初めてお酒を飲んだ。お酒のせいで頬を染めて目を潤ませる鈴は、千尋が思っていたよりもずっと破壊力があり、そんな鈴に千尋が色々堪えられなかったのは言うまでもない。

深夜、疲れ果てて眠る鈴をいつものように抱え、聞こえてなどいないと分かっていながらも鈴に向かって幸せな未来を語りかけていたのだが、突然サイドテーブルに置かれていた鏡が光った。

何となく嫌な予感がしつつも鈴を起こさないように腕を鈴の頭の下から抜いて鏡を持って隣の部屋に移動して開くと、そこには切羽詰まったような流星が映し出された。

外に居るのか、背景は闇に包まれている。

「一体何事ですか、こんな時間に」

面倒そうに髪をかきあげながら言うと、流星は何を思ったか無言で鏡をどこかに向けた。

そこには沢山の人が集まり、何か口々に叫んでいるのが見える。

「……これは？」

『君の親衛隊だよ。追放された五月が声掛けしてこれだけの人数が集まった。機を見てそちらに一斉攻撃を仕掛けるつもりみたい』

「は？」

『鈴さんの加護が最近凄く調子良いでしょ？』

「そうですね。ほぼ毎晩のように力を注いでいるので」

臆面もなく千尋が言うと、流星はそれを聞いて真顔で頷く。

『それだよ。番の加護が調子良いって言うのはそういう事だって事に気付いた人達がもう制御しきれなくて。おまけに鈴さんが千尋くんを誘惑して力を得ているって思い込んでるんだよ。それを聞いてもう俺達呆れちゃってさ。発情期ですら誰にも手を出さない千尋くんがさ、誰かの誘惑ぐらいでどうにかなる訳ないんだよ』

呆れ、というよりはむしろ怒ったような顔で流星は言う。そんな流星を宥めるように苦笑いを浮かべて千尋は腕を組んだ。

「それにしても随分短絡的ですね。そんな事をして自分達も五月さんのように追放されるとは考えないのでしょうか」

『考えてないね。息吹がそれとなく過激派の一人と接触して聞いたら、千尋くんが戻って王になれば、地上から助けた自分達は恩赦されるって思い込んでるみたい』

呆れたような流星に千尋も思わず大きなため息を落とす。

「揃いも揃って馬鹿ばかりなのですか？」

『はは！　君がそこまで嫌悪感を露わにするのも珍しいね。とりあえず今はまだ集まってる段階だけど、そちらに攻撃する気は満々みたい。いつ実行する予定なのかは分からないけど』

「彼女達――いえ、扇動者の意図は何でしょうね？』

『扇動者の意図？』

「ええ。例えば私が今すぐそちらに戻りその人達に直接話をしたとして、地上への攻撃を止めると思いますか？」

『どうだろう。まぁ一旦は収まるんじゃないの？』

「そうでしょうか？　そうは思えません。確かに純粋な親衛隊と名乗る人たちもいるのでしょう。ですが必ずその人達を扇動した人がいる筈です。それは五月さんなのか、別の誰かなのか。問題はそこですよ」

『そんなの千眼か謙信しか居なくない？』

「そうですね。ではその二人は彼女達におかしな入れ知恵をして何をしたいのでしょうか？　もし今私がそちらに戻り、その間誰か一人でも暴走して地上を攻撃する人が現れれば、その人達は容赦なく鈴さんの加護に貫かれます。そうしたらそれは全て鈴さんのせいになるのですよ。ただでさえ私の加護は二人の龍を死に至らしめている訳ですから」

『でもそれは先に手を出されたからで、あくまでも正当防衛でしょ？』

「もちろんそうです。ですが、それが高官の娘ならどうでしょうか。一度目は犯罪者、二度目は工房の嫁だからそこまで大問題にもなりませんでしたが、もしもこれが高官の娘となれば話は別です」

そこまで言って千尋は息を吸う。
「多分、それが狙いなのではないでしょうか」
『……なるほど。でもさ、君がこちらに戻ってきて自分達を攻撃するとは思わないのかな？　あの初の惨劇を見たら気付きそうなもんだけど』
「初に攻撃したのは楽を庇ったのと、あそこで暴れられると被害が大きくなるのを止めただけですから。彼女達からしたらむしろ自分達を庇ってくれたぐらいに思っているのではないでしょうか」
『あの状況を見てそんな風に思えるなんて、彼女達は一体どんな脳みそをしてるんだと思う？』
「全てが自分に都合の良いようにしか映らないのでしょう。最後まで話を聞かず、聞いたとしても都合良く解釈する。だから足元を掬われるのですよ」
そう言って微笑んだ千尋を見て流星が口元を引きつらせた。
『相変わらず笑顔で辛辣だなぁ。君の言い分だと狙いは鈴さんって事？』
「いえ。鈴さんはあくまでもついでですよ。狙いは地上そのものです。それを発端に復讐と称して地上への総攻撃をしかけるつもりなのではないでしょうか」
『あれをずっと野放しにしてるって事は、やっぱり王も噛んでるね。いや、むしろ既に次の王に千眼を推してるまであるね、これは』

「ですね。雅に頼んで佐伯家の井戸を見てきてもらいましたが、生憎何も出ませんでした。何かあれば決定的な証拠になったのですが……」

『どういう事？』

「実は――」

佐伯家の庭の井戸の話と歴代の龍神が残した日記の話を流星にすると、流星は何かに納得したように頷いた。

『そっか。やっぱりそれは原初の水で間違いないんだろうね。しかも日記の内容を聞く限り王が自らその龍に原初の水を持たせてる。その龍はもう死んでるの？』

「恐らくは。王から直接原初の水を渡されたと言う事は元は王の側近で、さらに地上に追放になった龍など私以外に一人しかいません。彼は都に戻ってすぐに何者かに襲われたと言われています。それはきっと役目が終わったという事なのでしょうね」

今でも都の歴史書には記録が残っている、史上最悪の事件を引き起こしたとされる雷龍の話は都ではあまりにも有名だ。

けれど今、明らかに捏造されていたのだと分かった事で彼には同情してしまう。

『ああ、あの世紀の大罪人か……その役目っていうのが佐伯家のような地上で龍の手足になって働

く駒を見つける事か……その龍が死んでしばらくして千尋くんが生まれた。これが原初の龍を彷彿とさせる力を持った水龍だった。だから早い段階で囲って龍至上主義に育て上げようとしたって事なのかな。君にその龍の後釜になってもらう予定だったとか？』

流星の言葉に千尋はため息を落として頷いた。

「かもしれません。そう考えると私が地上への追放を選んだ時に王があっさり許可を出したのは、私に人間に対する悪い印象を植え付ける為だったのでしょうし、初がどれほど私をただの追放にしろと言っても受理されなかったのも頷けますね」

『でもさ、それは物凄い賭けじゃない？　現に千尋くんは今やかなりの人間贔屓だ』

「そこまで考えが至らなかったのでしょう。だってあなたですら私が鈴さんと婚姻を結ぶと告げた時に絶句したではないですか」

『う……確かにそうだね。まさか君が、だったよ』

「私は都でも有名な龍至上主義でしたからね。いえ、龍至上主義という訳でも無いか……龍の事もどうでも良かったからこそ選んだ罰ですし」

『ほらー、そういう所だよー！　まぁでもそうなんだよね。君は表向きに龍至上主義を演じていただけで、実際の所は龍も人間もどうでも良かった。ただ、鈴さんに出会ってしまった。それだけだ』

その言葉に千尋は深く頷いてチラリと寝室を見た。耳を澄ますとここまで鈴の規則正しい心音が聞こえてきて、ふと千尋は目を細める。

「その通りです。愛は何よりも強いのですよ」

『ははは！　ちょっと前まで愛も知らなかった人がよく言うよ！　今の話をまとめると、王はあの龍に原初の水を持たせて地上に龍の思想を広める為の駒を作ろうとした。そしてそれは様々な形で地上をひっそりと蝕んでいた。大きな事件ではなくても佐伯家が手を出した案件は結構あるんでしょ？』

「ええ。あの家はなかなかの旧家だったようで、古くからずっと悪事を働いてのし上がった家のようです。少しずつ家を大きくするよう、その都度佐伯家が祀っていた神が指示を出していたようですよ」

佐伯家にあった枯れかけの井戸の水が原初の水だったと仮定して、千尋はすぐさま幸之助に佐伯家が犯した罪を分かる範囲で教えてもらったのだが、それらは一見何の関りの無い事件でも全て佐伯家の家を押し上げる為の事件ばかりだったのだ。

そして秘密裏に殺害された人達の遺体は、鈴が教えてくれたいわく付きの井戸から出てきたという。

『いずれ佐伯家を揺るぎない地位まで押し上げて、何か仕掛けようとしたのかな。気の長い話だ』
「人間からすれば相当な年月でも、龍からしたら大した年月でもありませんから。ただあちらの誤算は思っていたよりも私が鈴さんに傾倒していたという事でしょう」
『それは本当にそうだと思うよ。だから今回の親衛隊事件か。君をこちらに戻そうと必死なのかな』
「恐らくそうかと。だからこれは罠です」
『じゃあどうするの？　このまま放っておくの？』
流星の言葉に千尋は頷いた。そんな千尋を見て流星はギョッとしたような顔をする。
「むしろ手を出してもらいましょう。どんな理由があっても、地上への手出しは重罪です。全員しょっぴけば良い。地上の事は任せてください。守り抜いてみせますよ」
言い切った千尋に流星は真顔で頷いた。
『分かった。それが終わったらいよいよ君には戻ってきてもらうよ？　それは覚悟してるんだよね？』
「もちろん。私は鈴さんと都で幸せに暮らす為に戻るのです。不穏分子達には今の内に消えて無くなってもらいましょう」
『怖いなぁ、君は。間違えても都全土を焦土にしないでね？』

不安そうな流星に千尋は笑顔で肩を竦めた。
「それはお約束出来ませんね。あなたは今の内に無関係の人達を守る算段でもしておいてください」
『……そういうとこだよぉ、千尋くぅん……』
余計な仕事が増えたとばかりに流星は大きなため息を落とす。
それから短い別れの言葉を交わして寝室に戻ると、目が覚めてしまったのか、鈴が心配そうな顔をしてこちらを見ている。
「千尋さま……何か、あったのですか？」
あまりにも不安そうな鈴の顔を見て千尋が肩を竦めると、鈴は千尋の手をそっと掴んできた。
「私は、何をすれば良いですか？　私にも出来る事はありますか？」
「鈴さん……」
何かを察したかのような鈴の髪を撫でた千尋を、鈴はじっと子供の様な眼差しで見上げて来る。
他の人達のこんな顔を見ても千尋は絶対に口を割らないだろうが、相手が鈴だと胸が騒いで仕方ない。
千尋は諦めたように寝台に腰を下ろして鈴の髪を撫でながら言った。
「実は、あちらの淑女の皆さんが近々地上に手を出してきそうなのです」

「……え？」
「本来であれば私が今すぐ戻って止めるべきなのですが、もしかしたらそれこそが罠かもしれません。あなたと地上を陥れる為の」
「どういう……事です？」
不安気だった鈴の顔が千尋の言葉で辛そうに歪んだ。こんな顔をさせたい訳ではないのに、都の問題は鈴の顔をいつもこんな風に歪めてしまう。
千尋はそっと鈴を抱き寄せると、今しがた聞いた流星からの報告を全て告げた。その話に鈴が息を飲んで悲し気な顔をする。
「……王様が、そんな事をしようとしていたのですか？」
「多分、ですが。原初の水を取り扱う事が出来るのは王、ただ一人です。それが地上にあったという時点で王の失脚はほぼ確定ですよ」
考え込む千尋に、鈴が何か意を決したかのように顔を上げた。
「千尋さま」
「はい？」
「神事を……しましょう」

「え？」

「遅いかもしれませんが、間に合わないかもしれませんが、少しでも千尋さまの力を受け継いだ子を地上に残した方がいいかもしれません」

鈴の目は真剣そのものだった。確かに千尋の力を宿した子は、たとえ生まれていなくても母体に宿った時点で力を発揮する。それは必ず生まれてくるよう他の卵子よりもずっと力を蓄えているからだ。

「でもそれをするとあなたの体が……」

「耐えます！　だって、そうでないと千尋さまはまた自分を犠牲にしようとするでしょう⁉」

「！」

図星だった。地上を龍から守るには二つしか方法が無い。一つは鈴が言う様に短い間に沢山の千尋の力を宿した子を送り出す事だ。

そしてもう一つは千尋自身が大きな結界を地上に張るしかない。以前とは規模が違う、今回は日本全土を覆うような大きな結界だ。それをすれば間違いなく千尋はしばらくの間動く事が出来なくなるだろう。

けれどそれをするだけの価値があると千尋は思っていたのだ。

思いがけず図星をつかれて息を飲んだ千尋を見て鈴は言った。
「ほら！　やっぱりです！　私は欲張りでワガママなんです。だから千尋さま一人が辛い思いをするのも嫌だし、そんな事をして千尋さまが迎えに来てくれるのが遅くなるのも嫌なんです」
「……鈴さん」
それはワガママとは言わない。千尋はそんな言葉を飲み込んで鈴を強く抱きしめた。
「私は本当に幸せ者ですね。あなたのような人が嫁いできてくれたのですから」
「それは私もです、千尋さま。私もとても幸せ者なのです。あなたのような人に嫁ぐ事が出来たのですから。だからお願いです。地上を守るお手伝いを私にもさせてください。この地上を去るその日まで、龍神さまの花嫁でいさせてください」
「……そうですね。あなたの最初の願いを私はきちんと叶えるべきですね。では鈴さん、龍神の花嫁としてこの地上を共に守ってください」
鈴の髪を撫でながら言うと、鈴はようやく笑顔を浮かべて千尋を真っすぐ見つめて頷いた。
「はい！」
と。
そんな鈴を見て千尋は目を細めてもう一度鈴を抱きしめた。刻一刻と近づいて来る別れの足音な

ど聞こえないかのように。

翌日から鈴と千尋の神事は半年から元の一か月置きに変わった。そのせいで鈴は月に一度、今までの花嫁と同じように体調を崩すようになってしまった。

千尋と番を結んだ事で千尋の眷属になった鈴は、こまめに千尋の力を取り入れているからか今までの花嫁よりはずっと回復が早いと雅が言っていた。

最初は絶対に駄目だと反対していた雅も、鈴と千尋の決心が固いという事を知ってからは、倒れた時の鈴の身の回りの世話をしてくれている。

けれど神事特有の体の軋みは、痛みに慣れている鈴でも相当に堪えた。

「雅さん、ごめんなさい」

鈴が布団の中からポツリと言うと、雅はそんな鈴のおでこの汗を拭いながら悲し気に首を振った。

「あんたが悪いんじゃないよ。もちろん千尋も悪くない。こんな手段を取らせる都の龍の奴らが悪いんだ。鈴、何か食べられるかい？　千尋に力を流してもらうか？」

「……食べます。少しでも食べないとまた喜兵衛さんに心配かけちゃう」
鈴はどうにか起き上がって喜兵衛特製の栄養満点スープに口をつける。最初はそんなに食欲も無いと思っていたのに、一口、また一口と飲むたびに不思議とどんどん味がはっきりしてきて、気が付けばスープはすぐに飲み切ってしまっていた。
「うん、今回も大丈夫そうだね。やっぱりお粥よりこっちのが全然良さそうだ」
そんな鈴をじっと観察していた雅に鈴は恥ずかしくて俯くと、そこへ千尋がやってきた。神事を終えた所だというのに早速仕事をしていたのか、まだ結ったままだ。
「どうですか？　鈴さんは目を覚ましましたか？　ああ、目覚めたのですね」
「千尋！」
「千尋さま。はい、大丈夫です。今回も何とか乗り切りました」
今まで通りの方法に戻すと決めたあの日から早２カ月、未だ龍の攻撃は受けていない。それは都で羽鳥や流星たちが何とか抑えてくれているという事は、鈴ももう知っている。だからこそこんな事で弱音など吐いていられないのだ。
千尋に元気になった姿を見せようと寝台から下りようとした鈴を、千尋が手で制した。
「確かに顔色は悪くありませんが、起き上がってはいけません。このまま力を流します」

そう言って千尋は髪も解かずに鈴の側までやってきた。それと入れ替わりに雅が猫に戻って部屋から出て行く。

雅が部屋から出たのを確認した千尋は、おもむろに鈴を抱きしめて肩口に顔を埋めてくる。

「千尋さま？」

「すみません……今回もちゃんと目覚めた事に感謝しなければ……」

心配そうに言って何かを確かめるかのように鈴の背中や頬を撫でる千尋に、鈴も思わず強く抱き着いた。

「私は案外頑丈なのですよ、千尋さま」

「それはそうだとは思いますが、それでも毎回心配で仕方ないのですよ。まだどこか痛みますか？体は軋みますか？」

「もうどこも傷みません。それに背中の傷の痛みが無いだけでも大分楽です。ありがとうございます、千尋さま。千尋さまはちゃんとお休みになられましたか？」

「ええ。本当はあなたが目覚めるまで一緒に居たかったのですが、途中で羽鳥から連絡が入ってしまったのですよ」

「羽鳥さまから？」

まだ神事はあれからたったの2回しか出来ていない。それなのにもう龍たちは動き始めたのだろうか？

顔を強張らせた鈴を見て千尋はようやく髪を解いて笑った。

「そんな顔をしないでください。とりあえずのいつもの報告です。親衛隊の皆さんを取り締まるべく警らが動いているようです。あ、警らは流星が動かす部署なので信頼出来ますよ。そのおかげで今はどこか一か所に集まったりはしていないようですが、諦めたとは思えません」

千尋の言葉に鈴は真剣な顔をして頷いた。

「困った事に集まっただけではせいぜい注意して終わりです。何かしら動いてくれなければ、流星たちも動けない。かと言って今の状態で地上に総攻撃を仕掛けられても困ります。だからどうにかして親衛隊の力を分散させずに一か所に集められないものかという相談だったのです」

「一か所に……集める……」

それを聞いて鈴はある事を思いついた。菫に前に借りた小説に、主人公からヒーローを奪おうとする人が出てきたのだ。その人に対抗すべく、主人公は自身の危険を顧みずに相手に手紙を出すというものだった。結果として主人公は嫌がらせを受けたのだが、もしかしたらこれが使えるのではないだろうか？

「千尋さま、私、思いついてしまったかもしれません」
鈴の言葉に千尋はキョトンとして鈴から体を離してじっと鈴を見つめて来る。そんな千尋に鈴は言った。
「親衛隊の方達は皆さん、千尋さまがお好きなのですよね？」
「え？　ええ、まぁそうなのではないでしょうか。中には違う目的を持っている方も居そうですが、何せ親衛隊というぐらいですし」
「であれば簡単です。私がその方達に宛てて手紙を書くのです」
「……え？」
突然の鈴の提案に千尋は意味が分からないとでも言いたげに眉根を寄せる。
「私がわざと煽るような手紙を書き、ここに集中攻撃をしてもらうのです。そうしたら力は分散しないんじゃないでしょうか」
「それはそうかもしれませんが、そんな事をしたら本気であなたを殺しにかかってきますよ！」
「かもしれませんが、私には千尋さまの加護があります。それに今は千尋さまもここに居ますし」
鈴の言葉にとうとう千尋はため息をついて鈴の頭を撫でる。
「あなたは本当に頼もしいですね。ですが、それは駄目です。危険すぎます」

「でも地上全土を今襲われたら、それこそどうにも出来ません……だって、まだ神事もほとんどしてないのに……」

視線を伏せた鈴に千尋も黙り込む。何も手が無い。きっと千尋もそう思っているのだろう。

しばらくして千尋は長い息を吐いて鈴を抱きしめた。

「分かりました。あなたの作戦を羽鳥と流星に話しましょう。謙信達の思惑は、恐らく騒ぎを大きくして私を拘束する事です。ですが彼女達の目的はあくまでもあなたと私を引き離す事です。親衛隊の皆さんは未だに私が地上に居るのはあなたのせいだと思い込んでいます。私はそれに無理やり付き合わされているのだと。そこへあなたの言う作戦を仕掛ければ、彼女達はきっと暴走する……それこそ一斉にここだけを狙ってくるでしょう」

「はい」

「耐えられますか？　もちろん私も結界を張りますし応戦しますが、きっとあなたにもかなりの負担がかかりますよ？」

「耐えてみせます！　そんな事で倒れるような軟弱者では千尋さまの花嫁は務まりません。大分前に雅さんが言っていました」

「また雅は……そういう事は聞き流して良いのですよ、鈴さん」

意気込んだ鈴に千尋はようやく苦笑いだが笑みを見せてくれた。それが嬉しくて鈴が千尋に抱き着くと、千尋もそっと抱きしめてくれる。

「私の花嫁は本当に頼もしいですが心配ですよ、とても。あなたはきっと本当に耐えてしまうでしょうから……」

「それはいけない事ではありませんが、そんな事をしたら反動が凄いでしょう？　その時が一番心配です」

そんな事を言って千尋は本当に心配そうに鈴の顔を覗き込んでくるが、鈴だって千尋と共にこの地上を守りたい。そう思ってここに嫁いできたのだ。少しでも自分に出来そうな事があるのであれば、そのチャンスは逃したくない。

そこまで考えて鈴は小さく笑った。一体いつからこんなにも勇気が湧いて来るようになったのだろう。ずっと受け身で流れに身を任せてばかりいたのに、いつからか自分の意見を言えるようになり、今は千尋と共に地上を守りたいとまで考えている。そんな自分が不思議でおかしかった。

その日の夜に全員で客間に集まって、鏡で羽鳥と流星、そして息吹も交えて全員で会議をした。

「そんなの絶対に駄目だ！　鈴、あんたは忘れてるかもしれないけど、人間なんだよ!?　ここで唯

一の人間なんだ！」
鈴の作戦を聞いて一番に反対したのはやっぱり雅だ。そんな雅に喜兵衛と弥七も頷いている。
「そうだぞ、鈴。お前は確かにやんちゃでお転婆だったかもしれんが、それとこれとは訳が違う。それに千尋さまの加護が途中で切れたらどうするんだ？」
『それはそう。鈴さんの申し出は本当にありがたいし頼もしいけど、あまりにも危険だよ』
心配そうに言う流星と弥七に鈴は黙り込んだが、視線だけは絶対に下げなかった。そんな鈴を見て息吹が言う。
『良いじゃないか！　私は強い女は大好きだぞ！　よし！　もしその作戦を実行すんなら、羽鳥、私を地上に送ってくれよ』
「え？　まさか息吹さまが地上に降りてくるんですか!?」
驚いた楽に息吹はにっこり笑って胸を叩く。
『当然だろ！　こっちのごたごたに巻き込むんだからそれぐらいはしないとな！　な⁉』
そう言って息吹は隣に居る流星の顔を覗き込む。
『君は俺が止めても行くだろうからね……はぁぁ……』
既に鼻息を荒くする息吹を羽鳥がやんわりと遮った。

『それは無理だよ、息吹』
『なんでだ！』
『地上には僕が行く。君は捕まえた奴らの後始末をしないと。ていうか、君の管轄でしょう？　大将が率先して地上に降りてどうするの』
『……確かに。くそ！　良い所全部羽鳥に持ってかれるのか！』
悔しそうにその場で地団駄を踏む息吹に思わず鈴の緊張の糸が切れる。
そんな鈴の腕を隣から楽が軽く突いて来た。
「どうかしたのですか？　楽さん」
「俺も居るからな。ちゃんと守るよ。でないと菫に叱られる」
「！　楽さん！　ありがとうございます！」
はにかんでそんな事を言う楽に鈴が感動していると、見兼ねたのか千尋が咳払いをした。
「誰が降りて来ても構いませんが、恐らくそんな手は煩わせませんよ」
あまりにも冷たい千尋の声に一気に皆が静まり返ったが、しばらくして羽鳥がおでこを抑えながら言った。
『何か誤解しているね、千尋。僕達は君達を守りに行くんじゃない。都を守るために降りるんだよ』

『そうだよ、千尋くん。息吹はともかく万が一鈴さんに何かあったら絶対に君が暴走するからそれ止めに行くんだよ』
『そうなのか!?　私は参戦するつもりでいたぞ！』
『うん、君はね。でも俺と羽鳥は違う。千尋くんはあんな温室育ちのお嬢様達が束になっても勝てる相手じゃないよ。それは俺達が実際に経験してるからね。俺達が心配してるのは、千尋くんが暴走した時だよ』
「それは前みたいに鈴が歌えば借りて来た猫みたいに大人しくなるんじゃないか？　千尋は」
『だといいけど、もし鈴さんに何かあって暴走したとしたら？』
雅の千尋への言葉遣いに苦笑いをしながら流星が言うと、雅はようやくハッとしたように千尋を見上げている。
「……確かにその可能性を考えていませんでしたね」
「あんた！　一番肝心な事だよ！　あんたが暴走したら都どころか地上だって危ういんだからな!?」
「え、えっと、私がどうにもならないようにすれば良いのでしょうか？」
何とも言えない空気に耐えかねて鈴が口を開くと、皆が困ったように笑う。

『そりゃそうなんだけどさ、かすり傷一つ負わないって約束出来る？』
「そ、それは難しいかもしれません」
戦いに負傷は付き物だし、驚いて派手に転んだりしてかすり傷ぐらいはつくかもしれない。
『そうでしょう？　多分千尋くんは君がかすり傷を負った時点で怒りの臨界点を超えると思うんだ』
「千尋さま、そうなのですか？　私に今さらかすり傷が出来たぐらいでそんなに怒りませんよね？」
ね？　と念を押すように千尋に問いかけると、千尋はすぐさま鈴から視線を逸らす。これはもしかしたら流星たちの言う通りかもしれない。
「こりゃ大変だ。喜兵衛、戦えない俺達はどこかへ避難してた方がいいかもしれないぞ」
「避難ってどこへ？　それよりも千尋さま、鈴さんの事を思うのであればそんな簡単に暴走しないでくださいよ」
「そうだよ。大体何がかすり傷だ。言っちゃ何だがあんたが前に暴れた時、鈴はあんたのせいで肘や膝を思い切り擦りむいたんだよ！　それを棚に上げて他の奴らにやられたら暴れるなんてみっともない事だけはしてくれるなよ？」
喜兵衛と雅に叱られて千尋は申し訳なさそうに眉を下げて苦笑いを浮かべた。そんな千尋を見て

流星も息吹も羽鳥も目を丸くしている。
『猫ちゃんは凄いね！　正論の鬼と言われる千尋を正論で殴りつけるなんて！』
『雅さん千尋にも臆する事ないんだね。恰好良いな』
『雅が強い女だって私は一目見た時から知ってたよ。そうだ！　もし良かったら都に来て私の部署に入らないか⁉』
　口々にそんな事を言う龍たちに、雅はフンと鼻で笑っただけだ。そんな雅を見て思わず鈴は呟いてしまう。
「Oh……It’s　cool……」
「ん？　どういう意味だい？」
「あ、えっと、カッコイイ……って言いました」
　思わず漏れた鈴の声に雅はおかしそうに笑い、反対側では千尋が物凄い顔をして雅を睨んでいる。
「やっぱり私の永遠の好敵手ですね、雅は」
「なんだ、あんたも随分前に格好良いって言われて喜んでたじゃないか」
「そうですが、私は今みたいに思わず漏れた、という感じではありませんでした。鈴さんは本当に驚いた時や感動した時は英語が出るのですぐに分かるのですよ」

「ああ、そうかい。面倒な男だね。悔しかったら鈴に英語で格好良いって言われるような男になりな。で、話を戻すけど、結局誰が降りてくるんだい？」

さっさと切り替えて鏡を覗き込んだ雅とまだ悔しそうな顔をしている千尋に耐えかねたのか、流星が苦笑いを浮かべて話し出す。

『猫ちゃん、千尋くんはこれでも都では多分一番人気の男なんだよ』

「そうなのかい？　ただの面倒な男だけどね、千尋は。今も昔も。なぁ？」

そう言って雅が振り返ると、弥七と喜兵衛は頷き、楽は引きつりながらも千尋を見てどう答えようか迷っているようだった。

「そんな事はありません！　千尋さまは地上でもとても素敵な旦那さまです！　それに千尋さまが世界一格好良いという事は、私だけが知っていれば良いので今のままで良いのです！」

「鈴さん！　あなただけは本当に……何て可愛いのでしょうね……」

「はいはい。戯けんのは後にしてくれ。で、えーっと羽鳥だったか？　あんたが一番話が通じそうだ。結局誰が降りて来るんだい？」

『ん？　そうだね、やっぱりこの中では適任なのは僕かな。僕の仕事は犯人が捕まった後だから、当事者としても是非参加したいね』

「なるほどな。まぁそれがいいね。それじゃ、羽鳥頼むよ。しっかり鈴を守ってくれ」
『もちろん。ついでに雅さんの事もちゃんと守るよ』
そう言って羽鳥は雅にウィンクをして見せたが、そんな羽鳥の言葉にもウィンクにも雅は喜びもせず、それどころか腕組をして大きなため息を落とす。
「はいはい、どうもね。まぁでもあの偏平足女が居なくなったのはデカイね。あいつがその親衛隊とやらに居たら、何もかも無視して地上に降りて来そうだからな」
「それは本当にそうです。あの時逆鱗に傷をつけておいて良かったですよ」
「全くだよ。何なら割ってやっても良かったんじゃないか？　そうしたら百年ぐらい起きれないんじゃないのか？」
「どうですかね。私は以前流星たちに逆鱗を割られましたが、寝込んだのは百年程度でしたから」
「あんたの話は当てにならないんだよ。一般的な普通の龍はどうなんだって話をしてんだ」
「それは私にも分かりませんね。楽、どうなのですか？」
突然話を振られた楽は笑いを堪えながら顔を上げた。
「お、俺ですか!?　いや、俺も逆鱗割られた事ないので何とも……あと姉さん、お願いだから初さまの事偏平足って言うの止めて！」

『誰のことかなって思ってたら扁平足って初の事!?　猫ちゃん口悪すぎない？　もしかして俺にも変なあだ名ついてる？』
「あたしの口の悪さは千尋譲りだよ。それに名付け方も千尋譲りだ。恨むんならこいつを恨みな」
「失礼な。私ほど巧みな名付け方をする者はそうはいませんよ」
「どうだかね。目玉繰り抜かれそうになったからって、あたしの事をずっと「目玉さん」って呼んでたじゃないか」
「そ、それは内緒でしょう⁉　どうして鈴さんの前で言ってしまうのですか！」
　必死になって慌てる千尋と知らん顔をしている雅に鈴が思わず笑ったが、こんな千尋は龍達には珍しいようで、皆が皆、口をあんぐりと開けている。
「大丈夫です、雅さん。目玉さんも可愛いです！」
「そうかい？　あんた達は本当に似た物夫婦だね。子どもが生まれたら誰か他の人に名づけを頼みなね」
『いや～……千尋くん、地上の方が何だか生き生きしてるね』
『全くだよ。都は千尋には今までさぞかし窮屈だったんだろうね』
「それは違いますよ。地上だから生き生きしているのではなく、この面子だから生き生きしている

のです。今の神森家は最上の構成だと私は思っていますから」
突然の千尋の家族自慢に、今度はこちら側が皆口を開けた。
「ち、千尋さま変な物食いましたか？」
「じ、自分はいつも傷んでる物は避けてるはずなんだけど……」
「ち、千尋さまがそんな事思ってたとか、俺、震えそう……」
「こないだからちょくちょく気味が悪いね。一体何なんだ？」
「千尋さま……私も、私もそう思います！　いえ、今までの神森家は知らないのですが……」
思い思いに千尋の言葉に反応すると、それを聞いて千尋は嬉しそうに目を細める。
「羨ましいでしょう？」
そう言って微笑む千尋に龍たちは引きつりながらも頷いた。そんな皆にふと千尋が真顔になって言う。
「だからこそ守り抜きたいのですよ。あなた達、頼みますよ。何よりも鈴さんが自ら囮になってくれるのですから、あなた達はたとえ逆鱗を割られても鈴さんを守ってください」
『それはあれだね。死んでも鈴さんを守れって事だね』
「ええ」

当然だと言わんばかりに微笑んだ千尋に、龍たちも真剣な顔で頷く。これから何が起こるのか鈴には想像する事しか出来なかったが、神森家の一員として鈴も出来る限りの事をするつもりだ。

気合いを入れる為に拳を握った鈴を見て、千尋が心配そうに微笑んでいた事に鈴は最後まで気付かなかった。

鈴の提案を受け入れてありとあらゆる事態を想定した千尋は、その都度流星と羽鳥に連絡を取った。

いくら時間を費やしても足りない。鈴を絶対に傷つけないようにする為には、時間が全然足りなかったのだ。

そうこうしている間に、都ではいつまでも帰って来ない千尋に業を煮やしたかのように鈴への嫌がらせが加速していた。

「鈴さん、大丈夫ですか？」

「はい。少しずつ神事にも慣れてきたのかもしれません」

鈴はそう言って寝台に転がったまま千尋の舞をうっとりした顔で見つめて来る。
踊り終わると千尋はすぐさま鈴の隣に横になり、鈴が眠るまで背中を撫でてやると、鈴はすぐに安心したかのように眠りについた。
「不思議ですよねぇ……どうして回復するのでしょう……」
千尋は言いながら自分の頭に触れてみたが、そこにはもう角が無い。ただ鈴が今日も千尋の腕の中で安心して眠りについた。ただそれだけだ。それだけなのにこの回復力である。少しだけ自分が怖くなるが、それもこれも鈴のおかげだ。
千尋は目を閉じていつものように歌を口ずさむ。すると、鈴はすぐに口元に笑みを浮かべた。
いつまでもこの幸せに浸りたいが、そうは言っていられない。千尋は鈴を起こさないように起き上がると、そっと鈴を抱き上げて鈴の部屋まで運び、そのまま自室に戻って髪を結った。
「あれ!?　あんた、神事はどうした？　鈴は？」
書類や手紙の山を抱えた雅が入って来たのは、千尋が机に向かって書類を捌き始めたのとほぼ同時だった。
「今日も無事に終わりましたよ。昨夜力を流しておいたのが良かったようで、鈴さんは今日は大分楽そうでした」

「そうかい。で、あんたは？　角はどこへやったんだ？　まさか無理して隠してんじゃないだろうね⁉」

怖い顔をして近寄って来る雅に千尋は笑いながら首を振った。

「無理などしていませんよ。ただ自分でも不思議なのですが、鈴さんとの神事で回を増すごとに神通力の質が上がっているのを感じるのです」

「それと角と何の関係があるんだい？」

「質が上がれば疲れにくいという事です。今までの様に無理をして力を使わなくても、自然と出せるようになってきました。その結果、鈴さんの体への負担も少なくなってきているようです」

今までであれば鈴は時折呻いたり顔を顰めたりしていたが、今回はずっと穏やかだった。一番辛いと思われる段階でも鈴は少しだけ顔を歪めただけだったのだ。これは明らかに鈴の龍化が始まっている証拠だ。

それを雅に伝えると、雅は腕を組んで頷いた。

「なるほど……良い兆候、なんだよな？」

「もちろんです。ところで雅」

「なんだよ？」

「もうじき私は都へ戻る訳ですが、次に鈴さんを迎えに来た時、あなたも都に連れて行っても構わないでしょうか？」
「は？」
「ちなみに弥七と喜兵衛にはもう承諾の判子を貰いました。残るはあなただけなのですよ」
そう言って千尋は引き出しの中から一枚の書類を取り出して雅に渡した。雅はその書類をじっと見つめ、珍しく戸惑うような顔をする。
「な、なんでまたこんな……冗談だろ？」
「冗談などではありませんよ。もちろんあなたの気持ちが最優先ですが、出来ればついてきてくれると嬉しいです。それは鈴さんもだと思います」
「……返事はあんたが迎えに来た時でいいか？」
「もちろん。ゆっくり考えてください」
これ以上は雅の負担になると分かっている千尋は、書類だけを渡して仕事に戻った。そんな千尋を見て雅はすぐに猫に戻ると、書類を咥えて部屋を出て行ってしまった。

神事から三日。雅はまだ戸惑っていた。千尋からまさか一緒に都についてきてほしいなどと言われるとは思ってもいなかったのだ。

雅には恋人も居ないし子どもも居ない。だから迷う必要もないはずなのに、ずっと暮らしてきたこの屋敷を離れがたかったのかもしれない。

尻尾を下げて屋敷の全貌が見える所までやってきた雅は、今の神森家をじっと見上げた。

「猫は家に付くって言うしねぇ」

猫雅がぽつりと呟いてふと庭を見ると、そこには雀が何かを啄んでいる。雅は姿勢を低くしてその雀に狙いを定めると、まるで狩人のように雀に飛び掛かった。

雅は狙った獲物は絶対に外さない。雀は雅の手の下でもがき、必死に声を上げて抗議してくる。そんな雀をじっと見下ろして雅は雀から手を離した。

「ごめんよ、ちょっとだけ意地悪をしただけなんだ」

子供の頃はそれこそこうやって鳥や虫を捕まえては誇らしげに宮司や千尋に見せに行ったものだが、大人になって止めた。そんな事をしなくても毎日喜兵衛の美味しいご飯が食べられるし、千尋にくっついて各地を回っていたら珍しい物を沢山食べる事が出来たからだ。

そもそも千尋と居ると毎日忙しくてそんな事をしている暇もなかった。これからもそんな生活がずっと続くのだろうと思っていた。

ところが鈴が来てからその生活はガラリと変わった。上辺だけの笑みしか浮かべなかった千尋が鈴の歌で喜び、鈴の料理に感激し、毎日笑顔を浮かべるようになったのだ。

「鈴……鈴か。嫌だね、年取ると。あの子が本当の娘みたいに思えて来る……」

最初は鈴の事をいつもの大人しい花嫁だと思っていた。異人との混血だが、それだけだ。痩せっぽちで必死になって顔を隠す大人しくて気弱でどこかフワフワした花嫁だと。

ところが鈴はどんどん神森家に馴染んでいった。

元々雅は人間が好きだ。確かに壮絶な体験もしたが、境内にいれば人間は雅に優しかったから。まぁ、一部の花嫁や陰陽師に討伐されそうになった事は幾度かあるけれど、大抵の人間は猫の時の雅には優しかった。

けれど鈴は違った。猫の時の雅は抱っこしたり頬ずりしたろして可愛がるが、人型の雅にも同じように抱き着いてきたり、一緒に寝てくれだとか夜中にお手洗いについてきてくれ、などと甘えてきたのだ。

こんな花嫁は初めてだった雅は、しばらくして鈴の背景を知って胸が痛んだ。鈴はこんな所で一

生を終えるような娘ではない。自由に、伸び伸びと誰かに愛されて幸せになるべきだ。
狐たちとも相談して、千尋にも抗議したがそれは受け入れてはもらえなかった。
けれど今はそれで良かったと思っている。雅の大好きな人達が、全員同じ場所で笑っている。雅はそれでもう十分だったのだ。
「やっと恩返しが出来たと思ったんだけどね」
風龍の墓の隣に座って自慢の髭を撫でながら言うと、どこからともなく心地良い風が雅の背中を撫でる。
そんな風に雅は言った。
「あんたもそう思うだろ？」
風はまた雅の背中を撫で、頭を撫でた。もう秋だというのに春のような爽やかな風はきっと風龍の仕業だろう。鈴と雅で作った簡単な墓に喜んでいるのかもしれない。
「あんた達は良いね。死んでもこうやって好きな人の所に居られるんだから。あたしらは死んだらそれでお終いだ。そりゃずっと鈴の側に居てやりたいけどね。あいつらの子どもだって楽しみだよ。でもさ、その分いつか来るお別れが辛くなっちまう。そうしたらまた生まれ変わるんだろうけど、その時にはもう千尋も鈴も居ないんだよ。そんなの……寂しいじゃないか」

雅はそう言って右手で顔を擦った。ただの毛づくろいに見えるように。泣いてしまいそうになっている事を上手く隠せるように。

雅は猫だ。自由気ままで奔放で、言いたい事は言うしやりたい事をする。誰に何を言われてもそれは変わらない。

それなのに、どうしてこんなにも迷うのだろう。どうしていつものようにすぐに決断出来ないのだろう。誰か決断する為に背中を押してはくれないだろうか。

その時だ。屋敷の方から聞きなれた声が聞こえてきた。

「――さーん！　雅さーーーん！　どこですかー？　楽さん、そちらには居ましたか？」

「いねぇ！　おやつの時間に姉さんが居ないなんてありえない！　まさか千尋さまに何かされたんじゃ……」

屋敷から出てきたのは鈴と楽だ。辺りをキョロキョロと見渡しながら大声で叫んでいる。

「千尋さまに!?　そう言えば昨日、千尋さまのおやつの方が多いって喧嘩してました……」

「きっとそれだよ！　千尋さまたまに凄く大人気なくなるし、絶対それだって！　俺、千尋さまに抗議してくる！」

「あ！　待ってください！　楽さん、私も行きます！」

そう言って二人はまた屋敷の方に戻って行く。そんな後ろ姿を見ながら雅は笑った。
「そういや楽も居たね。あれももう息子みたいなもんだ。はは！　ざまぁ見ろ千尋！　二人に叱られるといいさ。そう思わないかい？」
その声に答えるように風は軽やかに周りの落ち葉を巻き上げてどこかへ飛んでいく。落ち葉の行く先をぼんやり見ていると、ちらりと鈴がこちらを振り返ってハッとした顔をする。
「しまった！　あんたのせいで見つかったじゃないか！」
「居たー！　楽さん！　雅さんが居ました！」
「えっ⁉　あ！　ほんとだ！」
雅が風に怒るのと同時に、鈴と楽は嬉しそうにこちらに向かって駆けてくる。
そんな二人を雅はその場で待っていた。逃げようだなんて思わない。猫らしく目を細めて「ニャァ」と小さく鳴くと、二人は息を切らしながら雅の元までやってきて雅を抱き上げる。
「どこへ行っていたのですか！　心配しました！」
「そうだよ！　おやつの時間なのに姉さんってばいつまでも来ないから、皆で屋敷中探し回ってたんだ！」
「そりゃ悪いことしたね。先に食べてても良かったのに」

何てことないかのように雅が言うと、鈴と楽は顔を見合わせて同時に首を振った。
「それは駄目です！　おやつは皆で揃って食べるものです！」
「そうだよ！　姉さんが居ないとずっと目の前で戯けられるんだから！」
そんな二人に雅は声を出して笑った。そして鈴の腕の中から飛び降りると、風龍の墓に手を合わせる。そんな雅に倣って鈴と楽も墓に手を合わせて言った。
「あとで風龍さんにもおやつのおすそ分けを持ってきますね！」
「その時は俺も来る！　花束持って空に昇ったんだろ？　また見られるかな？　姉さんも来るでしょ？」
何を期待しているのか、楽と鈴の目は輝いている。そして当然のように雅を誘って来る。
楽は本当に成長した。背も伸びたし声だって少しだけ低くなった。それでも中身はまだまだやんちゃで好奇心旺盛な子どものままだ。鈴だってそう。千尋と夫婦になったと言っても、まだまだ子どもなのだ。
「あんた達は本当に仕方ないね」
そう言って雅が屋敷の方に向かって歩き出すと、その後を鈴と楽が楽しそうにお喋りしながらついてくる。

雅はそれを聞きながらここへやって来た時とは裏腹に、尻尾をピンと上に向けて揺らしながら歩く。

心は決まった。目の前に見える屋敷を見上げると少しだけ切なくなるが、気分は上々だ。

その夜、雅は千尋の仕事机の上にある書類の山の中に肉球で判子を押した契約書をこっそりと忍ばせておいた。

神事から一週間が過ぎた頃、鈴は千尋の部屋で都への手紙を書いていた。

「これでどうでしょうか？　傲慢な女の人みたいに書けてますか？」

「どれどれ――いえ、頑張って傲慢さを出そうとしてはいますが、端々に良い人感が出てしまっていますね」

「……そうですか……難しいのですね、傲慢というのは……」

今しがた書いた手紙をそっと脇に避けてまた新しい便せんに手紙を書き出した鈴に目を細めながら、千尋は千尋で隣で手本を書いていた。多分、鈴には一生かかっても傲慢な手紙など書けない

からだ。
「これはどうでしょうか!?」
「――ふふ、さっきよりも随分と謙虚になってしまいましたね」
「えぇ……？」
困惑した鈴も可愛らしいが、内容を読んで千尋は思わず噴き出してしまう。
「鈴さん、これをお手本にしてください」
「千尋さまも書いてくださっていたのですか！　ありがとうございま――こ、これを書くのですか……？」
受け取った手紙に喜びながら目を通した鈴だったが、すぐさま震えながら千尋を見上げて来る。
「ええ。とても傲慢でしょう？　まぁ、初の手紙を参考にさせてもらったんですけどね」
「う、初さまは凄い方なのですね……私には一生かかっても作れない文章です……」
手紙の内容を読んで斜め上の方に向かって感動している鈴を見て千尋は苦笑いしながら言った。
「鈴さんには一生書けなくていいんですよ。はい、ではこれを写して実行しましょう」
「はい！」
そう言って鈴は千尋の書いた通りに手紙を書き写すと、それを千尋に預けてくれた。

「ありがとうございます、鈴さん。ではこの手紙は明日の朝、羽鳥がやってきたらあちらに送りましょう」
「は、はい。お願いします！」
「そんなに気を張らなくても大丈夫ですよ。私も羽鳥も居ますから」
「そうですね。それに楽さんも居ますもんね！」
「ええ。皆で地上を守りましょう。さあ、今日はもう終わりにしてください」
「はい！　千尋さまはまだ起きていますか？」
「いいえ。今日はもう私も休みます」
「そうですか！」
嬉しそうに微笑む鈴の頬を千尋はそっと撫でた。その拍子に鈴の頬と耳が真っ赤に染まる。
そんな鈴に千尋はそっと顔を寄せて耳元で囁いた。
「夜はまだまだ長いですよ、鈴さん」
「……はい」
俯いて恥ずかしそうに頷いた鈴を抱え上げた千尋は、そのまま寝室に移動した。
今回の事が終わればきっとすぐに鈴との別れがやってくる。それまではほんの少しの時間でも良

いから鈴に触れていたかった。愛していたかった。

翌朝、腕の中で鈴が身じろぎした事で目が覚めた千尋は、胸に頬を寄せて眠る鈴のおでこに軽い口付けをして、自分の代わりに羽織を置いて寝台を降りた。

ふと時計を見るとまだ午前４時半だ。あと半時もすれば鈴も起きだすのだろうが、今はまだぐっすりと気持ちよさそうに眠っている。

千尋は鈴を起こさないように隣室に移動すると、鈴が書いては失敗していた手紙をくずかごから拾い上げて丁寧に伸ばし、そっと箱の中に仕舞うと笑みを噛み殺した。

今まで色んな人に手紙を貰ったが、そのどれよりも真摯な鈴の手紙は、傲慢とは程遠い。どれほど書き直しても鈴の人となりが出ていてその度に千尋は思っていた。「これでは誰も怒らないだろう」と。

結局都への手紙は千尋が考えた文章になったが、以前の自分であれば容易く書くことが出来ただろうに、今回ばかりは千尋も随分と苦戦してしまった。それだけ鈴の人の良さが千尋にも染みついてきているのかしれないと思うと、嬉しくもある。

もしかしたら夫婦というのはこうやって似てくるのかもしれない。

そんな事を考えながら窓の外を見ると、突然空が光った。

その光を見て千尋が窓に近寄ると、光の中から優雅に羽鳥がこちらに向かって歩いて来る。
「羽鳥！　こんな時間になんですか」
窓を開けて小声で言うと、羽鳥は悪びれる事なく肩を竦めただけだ。
そんな羽鳥を見て千尋はため息を落として玄関の方に向かうよう指示する。
千尋は一旦鈴の元へ戻ると、千尋の羽織を握りしめて眠る鈴のおでこにもう一度口付けをして部屋を出た。
玄関を開けると羽鳥は何故かずぶ濡れだ。
「どうしたのですか？　こんな時間に。それよりも何故そんなにも濡れているのです？　またどこかで女性に水をかけられたのですか？」
「酷いなぁ。千眼だよ。家でぐっすり寝てたら奇襲かけられてさ」
まるで何てことないかのように言う羽鳥に千尋は目を見張った。
「見張られていたという事ですか？　それで、あなたはよく無事に逃げ出しましたね」
「まぁ僕は元々逃げ足だけは早いんだよ。あと、どんな手口を使って今まで重要人物を消してたのか興味あってさ」
それを聞いて千尋は腕を組んでため息を落とした。

「どうして自分を囮にするのですか。とりあえず入ってください。すぐに何か拭くものを持ってきますから」
「ありがとう。それにしても良い家だね。洋風の家って言うのも良いね」
「ありがとうございます。この屋敷は無理を言って建ててもらったのですよ。今まで龍神の屋敷と言えば社か純和風でしたから。でもいい加減飽きるでしょう？」
「なるほど。それで洋風にしてもらったんだ？　千尋らしいね。こういう所にはちゃんと金使うんだよね、君は」
「当然です。普段生活する場所は居心地良くしておきたいですから。あ、客間は廊下の突き当りの部屋なので先に行っててください。朝食も食べますよね？」
　千尋が言うと、羽鳥は分かりやすく目を輝かせて頷いた。そんな羽鳥に苦笑いしつつ廊下を歩いていると、廊下でばったり寝起きの喜兵衛と弥七に出くわした。
「おはようございます、二人とも」
「おはようございます……早くないですか？　また寝てないんですか？」
「寝ましたよ、ちゃんと。それよりも二人とも、特に喜兵衛」
「はい、何でしょう？」

「申し訳ないのですが、今日の朝食は一人分増やしてくれますか？　羽鳥がやってきてしまったのですよ」
千尋が告げると、二人は目を丸くして頷き小走りでそれぞれの場所へと向かっていく。本当に頼もしい二人だ。
手ぬぐいを持って客間へ行くと、羽鳥は疲れ果てたような顔をして暖炉の前で震えていた。
「すぐ火を入れます。はい、これで拭いてください。それで？　どんな手口だったのですか？」
手ぬぐいを羽鳥に渡しながら千尋が暖炉に火を入れていると、羽鳥は大きなため息を落として言った。
「どうもこうも無いよ。突然窓が割れたと思ったら、水の矢が部屋に飛び込んできたんだ」
「顔ははっきりと見たのですか？」
「いいや、見てない。でも水の矢なんて使えるの君達だけでしょ？」
「それはそうですが、水の龍ならもう一人居るでしょう？」
千尋の言葉に羽鳥はゴクリと息を飲んだ。
「まさか……王が？」
「ええ。だって今王はどこかに雲隠れしているのですよね？　だとしたら王の可能性もあるとは思

いませんか？」
「それはそうかもしれないけど……」
「それで、どうやって逃げたのです？　矢は一本だけだったのですか？」
「いいや。その後もしつこくしつこく追いかけてきた挙句、水の球に閉じ込められたんだよ。だからこれを使った」
そう言って羽鳥が胸元から取り出したのは、小さなペンダントだ。
「それは？」
「鏡。これで流星に助けを求めたんだよ。で、一旦は流星の家に避難してたんだけど、話し合ってそのままあの秘密の抜け道使って地上に下りてきたって訳」
「なるほど。それでずぶ濡れだったのですね。てっきりあなたの事だから、またどこかのご令嬢に水をかけられたのかと思いました」
「酷いな。でもこれであいつらがもうなりふり構わないって事が分かった。相当切羽詰まってると思うよ」
「そのようですね。そんな堂々と襲って来るとは」
ため息交じりに千尋が言うと、羽鳥は頷いた。

「元々僕はきっとあっちの殺害リストに載ってたんじゃないかな」
「何故そう思うのです？」
「僕が千尋派だから。そんな訳で千尋派の奴ら全員に伝令を出しておいたよ」
「ありがとうございます。ですが私の派閥なんてあるんですか？　初めて聞きました」
「あるんだよ。君が地上に下りてから出来た派閥なんだけどね。それまでは君が居る事で大人しくしてた高官たちの間に、何て言うか亀裂が入ったって言うのかな。君の品行方正な気質を受け継いだ派閥と、少しぐらい甘い蜜をすすってもいいだろって派閥がぱっくり別れちゃってさ。それから事あるごとにこの二つは衝突してたんだ。で、今回の事があったから一応千尋派には気をつけろって伝えといたんだよ」
「なるほど。それはご苦労様でしたね。しばらくはここに居てください。では鈴さんが書いた手紙は流星に送れば良いのですか？」
「そうだね。その方が良いと思う。まぁ救いは警備関係とかは全部流星と息吹の管轄ってとこだね。ただ財政関係は謙信だったからなぁ。あとどこの部署も高官になりたての若い龍とか事務に紛れ込んでたら困るね」
　面倒そうに髪を拭く羽鳥に千尋は同情の眼差しを向ける。

「何だか私が居ない間に都は随分ややこしい事になっていたのですねぇ。まぁでも、どのみちあなたはここへ下りて来る予定だったので問題はありません。ああ、お茶の準備が出来たようです」
そう言って千尋は立ち上がると、部屋のドアを開けた。そこにはワゴンに乗せられたお茶と羊羹が置いてある。
「どうぞ。鈴さん特製の羊羹です」
「ありがとう。ああ……熱いお茶が身に染みる……羊羹も美味しい……甘いんだね」
「ええ。今の羊羹は昔と違って羹ではなくてお菓子なのですよ。それにしてもやはり人間との混血だと風邪を引きやすかったりするのですか？」
「どうかな。僕はそんなでもないよ。ただ言われてみれば父は一般の龍よりは体が弱いかもしれない」
「そうなのですか。では私達の子どもも気を付けておかなければいけませんね」
まだ見ぬ鈴との子どもに思いを馳せながら千尋が言うと、羽鳥はおかしそうに笑った。
「この間は気が早くないか、なんて言ってたのに。まぁ素敵な未来を思い描くのは大切な事だよ。それから流星から伝言。親衛隊は表立って集まってはないみたいだけど、どこかで集会は定期的に行ってるみたいだ。場所はその都度変えてるみたいで、なかなか尻尾を掴めないってさ」

「そうですか。流星は一人で家に居るのですか？」
「いいや、息吹も居る。最近はもうずっと息吹が流星の所にいるみたいだよ。でも今回の事で二人も狙われる可能性があるから、僕の実家の方に行くよう伝えといた」
「何から何までありがとうございます」
「どういたしまして。それに今は僕の地元に栄も引っ越してきたし、丁度良いかなって思ってさ」
それを聞いて千尋は目を丸くした。
「栄まで移住したのですか？」
「そうみたいだね。甥っ子から手紙が届いたんだ。栄のおじちゃんは顔はまるで狩人みたいで怖いけど、滅茶苦茶良い人！　だってさ」
羽鳥は栄を思い出したのか、肩を揺らして笑った。
「栄はね、無駄に体が大きい上に顔に傷があるから余計に狩人みたいな風貌なんですよ。ですが子どもが大好きなのできっと上手くやっているのでしょう」
「千尋を庇ったんだっけ？」
「ええ。子供の頃に。そのせいで栄は私の警護を外されてしまったんです」
「そうだったんだ。それで独り立ちしてから栄を自宅で雇ったのか」

「栄しか信頼出来る方があの頃の私には居なかったのですよ。栄の事は本当の兄のように思っていますから」
「なるほど。だから君達は一切の連絡を取らないのか。変にお互いが疑われないようにって事でしょ？」
「ええ。鏡の履歴は消してしまえばそれで終わりですが、栄はあの通り不器用な男ですから、どこかで口を滑らせてしまうかもしれないでしょう？　それに鏡の履歴はいくら消しても王には知ることが出来てしまいますからね」
「それはそうだね。ところで雅さんは？」
「雅？　彼女は鈴さんが来てから朝食の準備をしなくて良くなったと言って朝食の時間までぐっすりですよ」
　千尋の言葉に羽鳥は少しだけがっかりしたようにため息を落とした。どうやら羽鳥は本気で雅を口説くつもりのようだ。

鈴が目を覚まして炊事場に向かうと、喜兵衛が既に忙しく調理場を走り回っていた。
「おはようございます、喜兵衛さん。どうかされたのですか？　それと千尋さまをお見掛けしませんでしたか？」
鈴が不思議に思って尋ねると、喜兵衛はようやく鈴に気付いたようで、ハッとした顔をして早口で話始めた。
「それが、既に羽鳥さまが到着してしまったんです！　朝食を一人分増やして欲しいと言われたのですが、ほら、今日の朝食は既に昨夜の間に仕込んでたので！」
それを聞いて鈴は青ざめた。
「そ、それは大変です！　お手伝いします！　あ、先にご挨拶に行った方が良いのでしょうか!?」
狼狽える鈴の後ろから、弥七がぬっと姿を現した。
「挨拶なんてしに行ってみろ。絶対に千尋さまは離してくれないぞ。それなら朝食をさっさと作ってそれから挨拶の方が良いんじゃないか？」
「た、確かに！」
大分千尋の性格を理解し始めた鈴は、ちょっとやそっとの理由では千尋が鈴を放してくれないという事も理解し始めていた。きっと雅がここに居ても同じ事を言っただろう。

「でもそれはそれで失礼なので、鈴さん、パンだけ仕込んでもらえますか？　そうしたら後は俺が引き受けます！　弥七、楽を起こして姉さん呼んできてもらえる？」
「分かった。楽はもうそろそろ腹減ったって起きて来そうだけどな」
「皆、おはよ～何か食べる物無い――って、どうしたの？」
「ほらな？」
「楽！　丁度良い所に！」
「楽さん！　待っていました！」
「お、おう、え？　な、なに？　皆して怖い……」
鈴と喜兵衛に腕をしっかり掴まれた楽は、事情を聞いてすぐさま雅を起こしに行った。そんな楽を見送って鈴はすぐさまパンの準備を始める。一人当たりの量は少し減ってしまうけれど、その分はオムレツでカバーすれば良い。
急いでパンを焼いた鈴は、後の事は喜兵衛と楽とまだ眠そうな雅に託して急いで客間に向かった。
客間の前までやってきた鈴は、髪を整えスカートの裾を直し、ちゃんと笑顔を浮かべられるように頬をぐにぐにと抓んで回していたのだが――。
「す、鈴さん……？　何をしているのです？」

突然ドアが開いたかと思うと、千尋が頬を抓んで回していた鈴を見下ろして声を震わせた。
「ひ、ひひほひゃま（ち、千尋さま）……」
「……っふ……よく伸びますね」
かろうじて声を絞り出した千尋は、口元に手を当ててとうとう鈴から視線を逸らして肩まで震わせる。
「ち、違うのです！　朝なので顔の筋肉の体操をしていたのです！」
「そうでしたか。ですがそんな事をしなくてもあなたの笑顔はいつも素敵ですよ。喜兵衛から聞いたのですか？」
「はい。羽鳥さまがいらっしゃっている、と」
「ええ。あなたの気配がしたのでドアを開けたのですが、もう少し間を開けてから開けば良かったですね」
「も、もう忘れてください！」
「すみません」
全然悪びれた様子の無い千尋に鈴はわざと怖い顔をして千尋を見上げてみたが、千尋がそんな鈴に怯むはずもない。

むしろ嬉しそうに鈴の頭を撫でて部屋に通してくれた。
客間に入るとそこには羽鳥が眠そうな顔をして羊羹を頬張っている。
「羽鳥さま、おはようございます！　ご挨拶が遅くなってしまって申し訳ありません」
深々と頭を下げた鈴を見て羽鳥の軽い笑い声が聞こえて来る。
「こっちこそごめんね、こんな早朝に。まだ寝てて良かったのに」
「いえ、どのみちもう起きる時間だったので」
「そうなの？　随分早起きじゃない？」
不思議そうに首を傾げた羽鳥に千尋が鈴の手を引いてソファに座るよう促してくる。
「鈴さんは大体五時には起きていますよ。でも今日は少し遅かったですね。昨夜のせいでしょうか……」
「いえ、羽鳥さまがいらっしゃったと聞いて慌ててパンだけ仕込んできたんです。それでご挨拶が遅れてしまいました……」
あと30分早く起きていればもしかしたら羽鳥を迎える事が出来たかもしれないと思い鈴がしょんぼりしていると、そんな鈴の背中を千尋がさすってくれた。
「そうでしたか。いつも朝早くからありがとうございます」

「パン？　パンって何？」
「小麦粉の料理ですよ。鈴さんの出身地での主食です」
「そうなんだ。初めて食べるな。ありがとう、鈴さん」
「はい！　喜んでもらえたら嬉しいです」
そう言って笑った鈴に羽鳥も笑顔を浮かべてくれる。
「可愛いねぇ。鏡で見た時も思ったけど、千尋は幸せ者だね」
「全くです。雅にもしょっちゅう言われますが、私もそう思いますよ」
言いながら千尋はさっきからずと鈴の頭を撫でている。そんな千尋を見て羽鳥は苦笑いだ。
「今からそんなので都に戻ってきた時大丈夫なの？　鈴さんそっくりのお人形とか作ってあげようか？」
「は、羽鳥さまはお人形を作れるのですか!?」
思わぬ羽鳥の特技に鈴が思わず前のめりになると、羽鳥は驚いたように頷いた。
「趣味で簡単な物をね、よく作るんだ」
「それは初耳ですね。何故また人形作りなのです？」
「千尋も知ってると思うけどうちの実家には子供がわんさか居るんだよ。で、しょっちゅう人形の

取り合いとかしてるからさ、僕が作れたら喧嘩しないで済むかなって思ってさ。で、気づいたらそこそこ作れるようになってたの」

「それはいいですね。では鈴さんの人形を作ってもらいましょうか」

目を細めてそんな事を言う千尋の隣で、鈴も目を輝かせた。もしかしたら、お願いしたら千尋の人形なんかも作ってくれたりしないだろうか？

そんな鈴の心の声が漏れていたのか、羽鳥はおかしそうに肩を震わせて口を開いた。

「君には千尋の人形を作ればいいのかな？」

「つ、作ってくださるのですか!?」

「構わないよ。その代わり」

「は、はい、何でしょう……」

とんでも無い事を言われたらどうしようかと身構えた鈴に、羽鳥はさらに笑う。

「萩の花が食べてみたいな。それからあのゼリーってお菓子も」

「萩の花？」

聞き慣れない名前に鈴が首を傾げると、隣から千尋が小声で「おはぎの事ですよ」と教えてくれる。

「そんな事で良いのですか……？」
「もちろん。君にとってはそんな事でも、都には僕が好きなお菓子を作れる人がもう居ないんだ。でもこの間君がぼた餅を送ってくれたでしょう？　あれは久しぶりに食べたお祖母様の味だった。お祖父様と感動しながら食べたんだよ。まるで子供の頃に戻ったみたいだったんだ」
　そう言って羽鳥は懐かしそうに目を細め、一口だけ残していた羊羹を口に入れた。
「それにしてもこの羊羹も美味しいね。僕の知ってる羊羹とは全然違う」
「……そうなのですか？　では、おはぎとぼた餅、それから羊羹とゼリーも作りますね。是非お祖父さまと召し上がってください」
「そんなに沢山作ってくれるの？」
「千尋さまのお人形をお願いするのです。むしろこれでは足りないぐらいです！」
「そっか、ありがとう。千尋、君は本当に幸せ者だよ」
「そうでしょう？　あなたにも早く運命の番が見つかる事を祈っていますよ」
　そう言って微笑む千尋の笑顔は何だかいつもよりも冷たい気がして鈴は内心ヒヤヒヤしていたのだが、何故か羽鳥はそんな千尋を見て声を出して笑う。
「あはは！　そんな顔しなくても誰も横恋慕なんてしないよ！　そもそも君の人形を頼んでくる

ような子に付け入る隙なんてないでしょ？」
「それもそうですね。出来上がりを楽しみにしていますね」
「はいはい。あ、何か凄く良い匂いがする……これ何の匂い？」
羽鳥の言葉に鈴は首を傾げたが、すぐにその正体がパンだと分かった。流石龍だ。鼻もすこぶる良い。
「これがパンです！　きっと焼けたんですね。千尋さま、羽鳥さま、少しだけ失礼しても構いませんか？」
鈴が問いかけると、千尋と羽鳥は笑顔で頷いた。
「もちろんです。どのみちもうすぐ朝食の時間ですから、食堂で会いましょう」
「はい！　それでは羽鳥さま、私はこれで失礼させていただきます」
「うん。朝食楽しみにしてるよ」
「はい！」
鈴は立ち上がる前に無意識に千尋の指に自分の指を絡ませると、何度か握って部屋を後にする。
それからすぐに炊事場に向かうと、パンが焼ける香ばしい匂いが炊事場に充満していた。
「はぁ、良い匂い……腹減った……」

「楽はさっき残りの羊羹全部食べたとこだろ!?　よく甘い物の後に食事なんて食べようと思うな!?」
オムレツを器用にひっくり返しながら喜兵衛が言うと、楽は鼻の頭をかきながら照れくさそうに笑う。
「お菓子と食事は入る所が別なんだって！　あ、戻って来た。早かったじゃん」
「はい！　何だか今回は千尋さまは凄くあっさり離れるのを許してくれました！　もしかしたら千尋さまもお腹が減っているのでしょうか？」
首を傾げながら鈴が言うと、そこへ食卓の準備を済ませたであろう雅がやってきて笑った。
「違うよ。多分あの羽鳥って奴の前に鈴を置いておきたくなかったんだよ」
「そうなのですか？　羽鳥さまはとても良い方ですよ？」
「だからさ。流星には息吹が居るけど、羽鳥にはまだ番が居ないんだろ？　だからさ」
「なるほど。嫉妬ですか。千尋さまらしいな」
雅の言葉に喜兵衛が苦笑いしながら言うと、楽も深く頷いている。
「さ！　客人を待たせる訳にはいかないよ、あんた達！」
「はい！」

雅の掛け声に皆で一丸となって急いで朝食を作ったのだった。

朝食を終えると今度は全員が客間に集まった。羽鳥は満足げに食後のお茶を飲んでいる。

「はぁ……これは凄いね……物凄い破壊力だよ」

「パンとオムレツでそんな事を言っていては、とんかつやステーキを食べた時に倒れてしまいますよ？」

「そりゃ君は毎日こんな食事をしてるんだろうけど、知っての通り都では落雁が最先端なんだよ。普段そんな食事しかしてない僕からしたら今でも十分ひっくり返りそうだ」

「流星たちもそれはもう驚いていましたね、そう言えば」

「そうだろうね」

「息吹など、最近は鈴さんに直接お菓子を所望してきますからね。全く厚かましい草龍です」

口では厳しい事を言いながらも千尋の目は優しくて、鈴は思わず微笑んでしまった。

「あんたに頼んだって無駄だからだろ。それより手紙はどうなったんだい？　もう送ったのかい？」

「ええ、流星に送りました。きっと今頃、流星から息吹、そして親衛隊の手に渡っているのではないでしょうか」

「す、すぐに攻撃を仕掛けて来ると思いますか？」
思わず不安になって鈴が言うと、千尋も羽鳥も首を振った。
「いえ、多分今夜あたりに皆で集まり、会議などを開いてからかと」
「まぁ、もしかしたら待ちきれずに暴走する人も居るかもしれないけど、その時はその時だね。臨機応変に動くよ」
「そうですか……気を付けてくださいね、お二人とも」
「ええ。だからどうか鈴さんは約束通り菫さんの所に避難していてくださいね」
「……はい」
最初は参加する気満々だった鈴だったが、やはり最終的には千尋に駄目だと言われてしまった。
千尋が鈴を心配してそう言う判断をした事も分かっているし、決定するまで何度も話し合ったけれど、結局鈴がここに居ても発動するのは千尋の加護なのだ。剣だって千尋の物で、鈴自身は何も戦う事が出来ない。
「鈴さん」
煮え切らない鈴に千尋の宥めるような声が聞こえて来たが、鈴はハッとして顔を上げた。
「違うのです。参加出来ない事はもう飲み込んでいます。ですが、千尋さまが心配なのは変わらな

いです……」

「……そうでしたか。強引に今回の作戦を立ててしまったので、鈴さんの心の中に何かわだかまりが残るのではないかと心配していましたが、そうではないのですね？」

「もちろんです！　私は千尋さまの妻で、千尋さまは私の世界一の旦那様です。その旦那様が今回は下がっていて欲しいと言うからには、それだけ危険だと言う事なのだろうと思っています。でも、だから余計に心配になるのです。千尋さまが私にかすり傷一つ負って欲しくないと思うのと同じで、私も千尋さまに傷を負って欲しくないです」

そう言って鈴は俯いたまま拳を握った。そんな鈴の手に千尋がそっと手を重ねてくる。

「ち、千尋さま？」

「浮かない顔をしていると思ったら、あなたは本当に……大丈夫です。私に傷を付けられるような龍は都には居ません。だから安心していてください」

「……はい」

千尋の言葉に鈴が頷くと、千尋は安心したように微笑む。

「最っ高の花嫁だね。僕も誰かにそんな風に心配されたいよ」

「ではやはり次の龍神はあなたがしますか？」

「ちょっと本気で考えそうになるね」
苦笑いを浮かべてそんな事を言う羽鳥に鈴は首を傾げたが、そんな鈴を見て羽鳥は笑った。

ほんの少しだけ時は戻り、パンが焼けたと言って客間を出て行った時の鈴の何気ない仕草に、千尋は思わず両手で顔を覆った。そんな千尋を見て羽鳥が軽く口笛を吹く。
「なに？　あれは挨拶なの？」
「……分かりません」
あんな事をされたのは今回が初めてだ。だから余計に千尋は衝撃を受けてしまった。いつもあんな事をするのは自分の方で、鈴はそれを恥ずかしそうに受け入れるだけだというのに、一体何事だ。
「もしかして鈴さんの行動に君はいつもそんな風に一喜一憂してるのかな？」
「まぁ、大体は。随分長く生きてきましたが、まるでついこの間生まれたかのような錯覚に陥りますよ」
鈴と出会って千尋の世界は一変した。どうして今まであんなにも無気力でいられたのか、それが

不思議でならない。
「充実してる証拠だね。お祖父様も言ってたけど、人間の寿命は短いからか、龍には思いつきもしない愛情表現をしてくるんだってさ。特に鈴さんは海外で生まれ育ったんでしょう？　だからより直接的なんだろうね」
「それはそうかもしれません。鈴さんに初めておやすみのキスをしても良いですか？　と聞かれた時はもうどうしようかと思いました」
「キスっていうのは？」
「口付けの事です。彼女が生まれ育った場所では頬や額への口付けは親愛の印なのですよ。それにこれも」
そう言って千尋は羽鳥に自分の左手を見せた。それを見て羽鳥は不思議そうな顔をしている。
「君が装飾品を付けるのは珍しいね」
「ええ。これは結婚指輪というのです。番の加護の交換が出来ない人間同士の誓いの印ですね。こうやって目に見える形で夫婦はお揃いの指環をつけ、他人にこの人は自分と番なのだと宣言出来るのはとても合理的です」
「へぇ面白いね！　番の加護は目には見えないもんね。だから人気のある龍は取り合いになってし

まう。その為の加護だと言っても過言じゃない。でもそうやって予めお揃いの指環をしているのは一目で見分けが出来ていいかもしれない」
「地上は随分と進化しましたよ。食、文化、芸術、医学、全ての面で。ですから、もう私達龍が力を貸す事もさほどありません」
「それは龍神という存在がもう必要ないと言う事なのかな」
「そうですね。昔ここに龍が住んでいた。それで良いのだと思います。原初の龍はこうなる事を予想していたのかもしれません。だから原初の水を一般の龍には扱えないように隠してしまったのでしょう。神はもしかしたら共に手を取り合う未来を夢見ていたかもしれませんが」
「どうなんだろうね。ただ言えるのは、これからも人間の文化は都にもどんどん入って来て欲しいよ、僕は」
屋敷中に充満しそうなパンの焼ける匂いに目を細めた羽鳥に、千尋も笑って頷いた。
「案外もっと単純な話だったのかもしれませんね。力のある龍は人を守り、その代わりに閃きに優れた人の文化を都に反映する。そうすれば互いに干渉する事なく、共に進化する事が出来る」
「だといいな。ついでに定期的に君のように人間を番に選ぶ龍が出て来てくれるともっと良いね」
笑う羽鳥に千尋も微笑んで頷く。ちょうどそこへ楽が食事の準備が整ったと呼びに来てくれた。

鈴が書いた手紙が無事に親衛隊の手に渡ったと連絡があったのは、その日の夜だった。
「随分時間がかかりましたね」
千尋の私室で夕食のとんかつに感動していた羽鳥が、一変して険しい顔をする。
「どうやって渡すか試行錯誤したみたいだよ。確かに息吹から誰かに渡した所で罠だってすぐに気付かれそうだしね。内容はどんな感じにしたの？」
「これです」
そう言って引き出しの中から取り出したのは鈴に書かせた千尋の下書きだ。その手紙に目を通した羽鳥の顔は完全に引きつっている。
「これを鈴さんに書かせたの？」
「はい」
「……凄い内容なんだけど？」
「仕方が無かったんです。鈴さんが書いた手紙はどれも隠し切れない善良さが現れてしまっていて」
「まぁ、そうだろうね。だからってこれは……大丈夫なのかな。流石の僕もここまでの内容だとは思って無かったんだけど、こんなに煽ったら本気で地上終わるんじゃないの？」
「ここに集中砲火させるにはこれぐらい書かないといけないと思ったのですよ。この間楽に手紙を

全て持ってきてもらって本当に良かったですよ」
「どういう事？」
「この手紙の内容は殆ど初が書いて寄越した手紙の内容をお借りしたのです。でなければ流石の私もここまでの文章は書き上げる事が出来ませんでした」
「……初姫は本当に……どうやったらあそこまで龍至上主義になれるんだろうね」
「分かりません。ですが、今回ばかりは彼女のおかげで助かりました。彼女ほど誰かの神経を逆なでする才能がある方は居ませんから」
「……そんな人とちょっと前まで番だったくせに。よくそんな感情で番関係を結べたね？」
「どうでも良かったんですよ、本当に。誰でも良かったし、今後の自分の人生などどうでも良かった。だから相手がどんな性格でどんな容姿でどんな役職でも私には関係無かったのです。それに周りもいい加減うるさかったので」
「凄いな。で、子孫だけさっさと残してさよならするつもりだったんだ？」
「ええ。婚姻を結んでその日の内に全て済ませてしまおうと思っていましたよ」
「……そういう所が水龍が冷酷だって言われる所以だと思うよ、僕は」
「それは他の水龍に失礼なのではないでしょうか。私を基準にはしないでもらいたいですね」

淡々と言う千尋に羽鳥は引きつっていたけれど、今度は苦笑いで言った。
「大丈夫。その伝説は君で終わるよ。断言する」
「どういう意味です？」
「鈴さんとのやりとりを見てたらそんな事は絶対に思わないって事だよ」
「そうでしょうか？」
「そうだよ。で、きっと今頃あっちでは怒り狂ったお嬢さん達がどこかで集会を開いている頃かな」
どこか楽し気にそんな事を言う羽鳥を軽く睨みつけた千尋は、下書きにした手紙を懐に仕舞った。
「流石に今日はもう仕掛けては来ないでしょうが、一応結界は強化しておきます。それから明日の朝一番に鈴さんを的場家にやろうと思います」
「それが良いね。雅さん達もついて行くんでしょ？」
「ええ。一応楽もつけるつもりなので、羽鳥、頑張りましょうね」
ニコリと微笑んだ千尋を見て羽鳥は何とも言えない顔をして曖昧に頷くが、そんな羽鳥を無視して千尋はすぐに的場家に手紙を持たせたカラスを飛ばした。
翌朝、昨日の内に全員にこれからの予定を話していたおかげか、いつもの時間よりもずっと早い時間に鈴たちは朝食と昼食、さらには夕食の準備までして、必要な物だけを持って屋敷を出発して

いった。
鈴は車に乗り込む前に何度も何度も千尋に「気を付けてください」と言って新しいお守りをくれたのだが、今回は羽鳥とお揃いだ。
「お揃いだね、千尋」
「私の部屋にある鈴さんの箱がお守りで一杯になってしまいそうですよ」
おかしそうに笑った羽鳥に千尋は苦笑いして言う。
昨夜寝る前に鈴が一生懸命何かを縫っているなと思ったら、どうやら今回もまたお守りを縫ってくれていたようだ。
「そんなの作ってるの？」
「ええ。鈴さんに頂いた物は何でも取ってあります。いつか見返して二人で笑いたいので」
何気なく惚気る千尋に羽鳥は肩を竦めるが、千尋は鈴が作ったお守りを撫でて懐に大切に仕舞う。
あちらがいつ攻撃してくるかは千尋にも分からない。流星たちが不穏な気配を察知したらすぐに連絡をくれるようになっているが、全く予想がつかないのも面倒だ。
それからしばらく羽鳥と二人で緊張した面持ちであちらからの攻撃に備えていたのだが、待てど暮らせど攻撃は仕掛けられてこない。

朝食も食べ終わり、昼食を食べても都は動かなかった。
「流石にあんな分かりやすい挑発には乗らないかなぁ」
花壇の脇にある長椅子に座って羽鳥が足を投げ出しながら言う。そんな羽鳥を見て、とうとう千尋もため息を落として羽鳥の隣に腰かけた。
「まぁ中心になっているのは高官のお嬢さん達ですしね。あれぐらいの挑発に簡単に釣られていたら、会議など到底無理です」
「会議は忍耐が何よりも要求されるもんね。撃たれ弱い奴と煽られ耐性のない奴ははっきり言って邪魔だよ」
「そういう意味では彼女達はなかなか優秀なのかもしれませんね。簡単には引っかからなかったという事ですから」
もしくはあちらもまた機会を伺っているかのどちらかだが、すぐに手を出さなかったのは褒めてやりたい。たとえその後ろに千眼や謙信が居るのだとしても。
「どうする？　鈴さん達をこっちに戻す？」
「いえ、三日ほど様子を見るつもりです。的場家にもそうお願いしておきました」
「そうだね。それが良い。で、僕達はここでのんびり空を見上げている訳なんだけど、この後あっ

ちはどう動くと思う？」
「……そうですね。今回の事で結構な人数の高官があちら側に回るでしょうね。今まで中立の振りをしていた人たちが炙り出されると思います」
「だよね。まぁそれはこちらからしたら凄く都合が良いんだけど、そうしたら向こうの勢力は一気に高まる。こっちはまた何人か囮用意しないとかな」
　そんな事を言いながら羽鳥は髪をかきあげて空を見上げた。
「ではその時が私が戻る合図という事ですね」
「そういう事。その時は僕が高官達の弱みを全部握った時だよ。いよいよ最終仕上げだね。それにしても暇だね」
「何かお菓子でも持って来ましょうか？」
「鈴さんが作って行ったの？」
「いえ、鈴さんはいつも作り置きをしてくれているのですよ。クッキーを」
「お菓子の作り置き？　ああ、楽くんの為か」
「いえ、皆の為です。ちょっと待っていてください。私専用のクッキー缶を取ってきます」
「う、うん。ありがとう」

千尋専用と聞いて羽鳥は口元を引きつらせたが、そんな羽鳥を置いて千尋は立ち上がって自室から缶を持って戻った。
「随分と可愛い缶だね」
「クッキーを食べながら仕事をすると捗るのだと言ったら、鈴さんがくれたのですよ。ちなみにこれは二代目です」
「一代目は？」
「今は大切な物や書類を仕舞っておく缶に昇格しました」
「缶に大切な物を仕舞うのは何ていうか、とても人間的だね」
「そうですか？　鈴さんがやっていたのですが、案外便利ですよ。
そう言って微笑んだ千尋を見て羽鳥が苦笑いを浮かべて頷く。
それから二人で呑気にお菓子を食べながら待っていたけれど、やはり何の攻撃もない。完全に肩透かしを食らってしまった。
夕食は鈴が作っておいてくれたおにぎりとみそ汁だけの質素な夕食だったけれど、中の具材はどれも鈴が丹精込めて作った具だったので、ただのおにぎりでも千尋にとってはご馳走だ。
夜もすっかり更けた頃、千尋と羽鳥が屋敷にもう一度結界を張りなおそうと外に出た時だった。

「あ、すみません。鈴さんから夜の連絡です」
「なに、それ？」
「離れている時は必ず夜に連絡を取り合おうという約束なのです。ですが、今日は少し早いですね」
千尋は言いながら鏡を開いて息を飲んだ。
『ち、千尋……さま……』
鏡に映し出されたのはあちこち怪我を負った楽だ。その姿はボロボロで、まるで何かと戦った後のようだった。
「楽!?」
『……あいつら、こっち攻撃……して――危ない！　鈴！　いいから逃げろ！』
『駄目、です！　私が逃げたら、きっと、追って……くる……』
かろうじて聞き取れた鈴の声はか細い。この連絡をしてくるまでに既に散々攻撃を受けたのだろう。
千尋は鏡に向かって叫んだ。
「すぐ行きます！　もう少し持ちこたえてください。羽鳥！」
「うん」

今が深夜で良かった。二人はすぐさま龍の姿に戻り闇に紛れて的場家に向かった。
「あそこだね」
「ええ」
前方では音の無い雷や色とりどりの矢が的場家の裏手にある林の中にひっきりなしに降り注いでいる。
それを見て千尋はゴクリと息を飲んだ。一体何体の龍が仕掛けてきているのだ。
鈴たちが危ないと思って的場家に避難させたが、どうやらそれが仇になったようだ。
千尋は辺り一帯にすぐさま大きな結界を張った。
すると、矢は一度結界に吸い込まれ、そのまま消えて行く。
それを確認した千尋が地上に降りると、前方から楽の悲痛な声が聞こえて来た。
「おい、目開けろよ。千尋さまが来てくれたぞ。寝るなって、なぁ起きろよ！　返事しろ！」
「楽！」
必死になって鈴を揺り起こそうとする楽の元まで走り、ぐったりと倒れる鈴の姿を見下ろして千尋は言葉を飲み込んだ。
一体ここで何があったのだ。鈴は的場家に居たはずだ。それなのにどうしてこんな林の中にいる

のだ。どうしてこんなにも泥と血に塗れているのだ。そう思った途端、角が姿を現す。
千尋はすぐさま鈴の体を抱き、心音を確かめるように胸に耳を押し当てた。鈴の心音はいつもよりも早くて苦しそうではあるが、それは力を使いすぎた代償だ。時間はかかるだろうが、必ず回復する。
その時、ダラリと垂れた鈴の手に千尋の剣がしっかりと握られている事に気付いた。
それに気付いた千尋は、鈴を強く抱きしめて涙を必死になって拭う楽の肩も抱き寄せた。
「大丈夫ですよ、楽。鈴さんは力を使いすぎて意識を失っているだけです。しばらく寝込むかもしれませんが、命に別状はありません」
「……ほんと？　こいつ、馬鹿なんだ……皆を庇って一人でこんなとこまで来て……本当に馬鹿なんだ！」
堪えきれなくなったのか、楽は千尋に縋りついてきて叫んだ。
そんな事よりも千尋が心配しているのは、鈴の体があちこち傷だらけだという事だ。血を失いすぎている訳ではないが、それでも相当な怪我をしている方が心配でならない。
その時、後ろから羽鳥の怒鳴り声が聞こえて来る。
「千尋！　来るよ！」

その声に頭上を見上げると、色とりどりの矢が一つの大きな矢となって降って来るのが見えた。それを見て千尋の中の何かが音を立てて切れる。

「――楽、目を閉じていなさい」

「……え？」

「私が今からする事をあなたは見る必要ありません。鈴さんをお願いします」

千尋は鈴を楽に押し付けて立ち上がると、龍に姿を変えた。結界の中であれば外からは見えはしない。傍から見れば大きな雷が林に落ちたと思うだけだろう。

千尋は体をくならせると結界ぎりぎりまで昇り、都に向かって思い切り力を使った。千尋の力は結界を抜け、降り注いで来た大きな矢すらも飲み込んでまっすぐに都に向かって昇って行く。

それはあたかも地上から特大の雷が空に向かって落ちていくようだった。

都からの矢は一瞬で消え去った。

けれど、千尋の気はそれでは収まらない。煮えたぎるような怒りが体中を駆け巡り、沸騰しそうな程暴れ狂っている。

都の連中が鈴に傷を負わせた。鈴はあれだけ注いだ力を使い切り、さらには自分の力まで使いきって血に塗れて泥だらけになり、それでも立ち向かったのだ。龍に。気を失ってもなお離さなかっ

た千尋の剣が、それらを物語っていた。
「羽鳥、すみません。計画は白紙です。親衛隊を殲滅します」
自分でも驚くほどの冷たい声に、楽がビクリと肩を震わせて羽鳥は一瞬固まった。
「え？　え!?　ちょ――！」
羽鳥の慌てる声を無視して千尋は龍に戻ると、空に向かった矢を追いかけるように都へと駆け昇った。
鈴が元気で笑っていてくれないと意味が無いのだ。千尋の生きる意味は、鈴しかないのだから。

耳元で何やら誰かが怒鳴っている。
「流星！　ごめん！　千尋が切れた！　すぐに警戒態勢に入って！」
鈴は一度遠のいた意識をその怒鳴り声でどうにか繋ぎ止めた。千尋の名前が聞こえたからだ。
『嘘でしょ!?　まだ全員確保出来てないんだけど!?』
「嘘じゃない！　親衛隊を殲滅するって言ってたから、もうじきそっちに着くと――」

羽鳥の声がそこで途切れ、続いて鏡から流星の怒鳴り声が聞こえて来た。
『おい！　すぐに全員集合するように伝えろ！　千尋を包囲して逆鱗を割る準備を！』
そこで流星の声は途絶えたのだが、それを聞いて鈴はカッと目を見開いて跳ね起きた。
「駄目です！　そんな事絶対にさせません！」
「鈴さん!?　よく起き上がれるね⁉」
「お、お前、大丈夫なのかよ!?」
突然起き上がった鈴を見て羽鳥と楽が驚いたように目を丸くして鈴を見つめてくるが、それどころではない。このまま千尋が暴走したら逆鱗を剥がされてしまうかもしれない。
鈴は羽鳥の両肩を掴んで懇願した。
「羽鳥さま！　一生のお願いです、私を都に連れて行ってください！」
「ええ!?」
驚いた羽鳥の肩に爪が食い込むのではないかと思う程握りしめてじっと羽鳥を見つめていると、やがて観念したかのように羽鳥が両手を上げた。
「本当に頼もしい花嫁だよ、君は」
「羽鳥さま!?」

「ありがとうございます！　楽さん、雅さん達をお願いします！」
最初に攻撃を受けたのは雅だ。鈴を庇おうとして矢が腕を掠めた。その傷は思っていたよりも深く、今は菫たちが様子を見てくれている。
喜兵衛と弥七もそうだ。二人も鈴を庇おうとした。
「いや、でも――」
「この命に代えても、千尋さまの逆鱗を割らせたりしません！　絶対に！」
鈴がもう少し早く攻撃に気付いていればこんな事にはならなかったかもしれない。もう少し早く千尋に連絡をする事が出来たかもしれない。菫たちが試しに鏡を使ってくれようとしたみたいだが、千尋の契約者ではないからか、鏡は反応しなかった。
そうこうしている間にも矢が次から次へと降り注ぎ、鏡を開いている暇すら無くて今に至ってしまった。
「そんな訳だから楽くん、ちょっと都に行ってくるよ。お留守番と雅さん達をよろしくね」
「は、はい！　気を付けろよ！　あっちに行ったらお前、敵だらけなんだからな！」
「はい！」
鈴は楽の忠告に頷いて羽鳥に近寄ると、羽鳥は目の前で龍に戻って姿勢を低くする。

「乗って。でも絶対に頭は上げないで、僕にしがみついてるんだ。手は離さず、顔を僕の背中にしっかり埋めていて」
「は、はい」
「それじゃあ行くよ」
「お願いします！」
そう言って鈴は羽鳥の背中に顔を埋めると、その背中にしがみついた。痛くはないだろうかと思いつつ鬣の一部を握りしめ、覚悟を決める。

以前千尋に都への道のりはどれぐらいだと聞いたら、千尋は一瞬だと言っていた。鈴はそれを今、痛いほど実感している。
眼下には地上と同じ、いや、菫が以前見せてくれた絵に描かれていたような古い家や建物がひしめきあっていた。
一瞬そんな光景に感動しそうになったが、今はそれどころではない。街は騒々しくあちこちで怒鳴り声と荒々しい咆哮が聞こえてくる。鈴達の周りにも沢山の龍が行き交っていて、その光景は鮮烈に鈴の目に焼き付いた。

龍たちは皆、一か所に向かって飛んでいる。
「千尋さまはあちらにいらっしゃるのでしょうか」
「多分ね。速度を上げるよ」
「はい」
羽鳥がそう言ってスピードを上げると、一瞬で街の端っこに辿り着いた。
そこには驚くほど沢山の人だかりが出来ていて、その遥か向こうに輝く水色の龍が見える。千尋だ。
そのすぐ下には一か所に集められたのか、色とりどりの龍たちが怯えたように千尋を見上げ、震えている。
それをさらに囲むように金色の龍たちが何かを持って機を伺っているようだが、彼らが動けないのは、そのさらに外側にズラリと円環のように綺麗に整列した数百本もの青い矢のせいだろう。
それを見て羽鳥は息を飲み、鈴は咄嗟に叫んだ。
「千尋さま！　いけません！　流星さまも！　千尋さまを攻撃しないでください！」
思わず鈴が叫ぶと、下からよく知った声が聞こえて来た。
「鈴!?　何でここに!?　それにその怪我！」